Alternative Systems Study Bulletin

第７巻 第５号
（1999年12月15日発行）

目　次

はじめに

アソシエ21関西文献解題

プレ講座 レジュメ

京大11月祭シンポジウム レジュメ

他

あとがき

文献

編集人　境　毅

連絡先　〒600-8691　京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱169号
貿易研究会

会　費　正会員　：　年間 1口　１０万円
賛助会員　：　年間 1口　3万円
購読会員　：　年間 1口　1万円
会費振込先（郵便振替）（口 座 名）資本論研究会
（口座番号）０１０９０－５－６７２８３

「アソシエ21」へのご参加を！

新たな世紀へ批判的知性の協働を！

資本主義批判の知的・文化的なイニシアティブと交流の場へ

二〇世紀は、人びとが資本主義をこえる未来への希望を社会主義に託し、その希望を実現する世紀になると思われていました。しかし、この四半世紀、資本主義に訪れている連続的な危機と試練は、多くの人びとにきびしい抑圧と不安をもたらしながら、とくに日本では、企業中心社会の特性がかえって強められてきています。それにともない、資本主義に批判的に対抗し、働く人びとや生活者を主人公とする社会への変革をめざす社会諸運動や、それを基礎づけるべき思想、文化、理論に、かえってきわめて重い閉塞情況を生じています。社会の進歩を期待する主体の危機と混迷が深い。どうしてこうなるのでしょうか。

実際、左派労働運動の退潮、社会党の変質・消滅、新左翼諸運動の分裂と抗争、理論と実践、学問研究と社会的諸運動との乖離、日本の批判的知性にとって再考し、のりこえなければならない課題は幾重にもおりかさなっています。ソ連型社会の抑圧と危機、ついでその崩壊も、ソ連型「正統派」マルクス主義に多かれ少なかれ批判的であった日本の左派の理論と運動にまでも、直接間接に思いがけない打撃を加え、社会主義への幻滅を広げていきます。その責任の一端は、日本における社会主義の思想と理論の不備にもあったのではないでしょうか。いまや、総保守化した日本の政治状況で、社会主義は運動でよびかけられることもほとんどなくなっています。資本主義の修正と改良をこえる社会の変革への争点は、世界と日本の未来のために、もはやありえない選択肢なのでしょうか。

もちろん、われわれが期待したい反転攻勢への契機が存在しないわけではありません。社会主義の最終的な敗北と資本主義の勝利をうたった新自由主義による「歴史の終わり」の総括は、バブルの崩壊、アジアの通貨・金融危機により説得力を失い、日本に蓄積されてきたラディカルな思想と理論の継承と発展の試みも活力をとりもどしています。欧米に広がるマルクス・ルネッサンスの展開も、日本の左派の困難克服へまだ生かされていない多くの可能性を示唆しています。これからの社会主義に向けて、ソ連型社会の総括的検討や中国の社会主義市場経済の実験をふまえ、新たな理論的構想も探られつつあります。企業社会に協力的な労働運動主流への反省と批判にたった戦闘的労働運動の、新たな組織拡大への試みもすすめられています。企業中心社会に対抗する協同組合運動、それぞれのテーマにそった市民運動やNGOにも、新たな争点や代替戦略の方向が提起されつつあります。とくにジェンダー・イッシューや環境問題、さらには南の世界の深刻な貧困問題などには重要な挑戦課題が提示されています。また、そこから抑圧されたものの立場に立った新たな歴史観やものの見方が提起されてもいます。

こうした諸契機を大切に、新たな世紀へ民衆の未来に期待する知的・文化的なイニシアティブを、日本にあらためて広げる可能性はないのでしょうか。日本の批判的知性・ラディカルな文化創造のイニシアティブをたがいに促し励ましあい、連帯と交流を広げてゆく協働作業へ、知恵と多少の努力とを初心にもどってよせあうことはできないでしょうか。

たとえば、社会科学と社会思想、経済学と歴史学、人文科学と自然科学、既成の学問的諸分野と女性学などの新しい学問的分野、それらと文学、評論、社会諸運動など、異なる領域の研究、思索、経験、見聞が、いま日本の左派のあいだで結集できるしくみがとぼしい。マルクスの思想と理論を非マルクス派のラディカルなアプローチと交流させる試みも十分とはいえない。ラディカルなシンクタンクをめざす諸運動のなかから提起される重要な課題を広い視野でとらえかえし、相互の脈絡をあきらかにし、共有しあう努力もさらにすすめてみたい。世代間、両性間の協力を大切に、新しい思想が伸びてゆけるスペースを広げてゆきたい。海外の批判的知性との交流もこれからさらに重要性を増すにちがいない。

こうした一連の課題をまえにしてなにができるか、なにからはじめるべきでしょうか。一見迂遠のようでも、あらためて取り組むべき問題群の性質をたがいに協力してあきらかにしつつ、日本の批判的知性のイニシアティブとその交流への伸びやかで継続的な協働のしごと場をもうひとまわり大きくつくりだすことから始めるべきではないのでしょうか。

そのためには、当面、想いを同じくする人びとと支えあう、**季刊の雑誌**、ニュー**ズレター**をかねた月報、**諸分野にわたる研究会**、**連続講座**、**語学講座**、**講演会**、**出版活動**、**ブッククラブ**などの企画を、広い分野からのイニシアティブで知的・文化的運動として創りだし、これを広げる連帯と協力への集まりがほしい。日本の社会主義運動や批判的知識人のおかれている困難な情況を考えあわせれば、こうした課題の意義は大きく緊急ですが、しかしまた謙虚に再出発する心がまえも求められています。

われわれ呼びかけ人は、ほぼこうした主旨にそって話しあい、多くの賛同人の支援もえて、『アソシエ21』を結成することにいたしました。呼びかけ人・賛同人とともにこの交流・協力の場を発足させ、維持する会員になっていただけないでしょうか。参加いただける方はさっそくで恐縮ですが、同封の振替用紙で、会費の納入をお願いいたします。きびしい時代が続きますが、21世紀にむけ日本の民衆の未来に希望を再生させるため、ぜひお力添えのほどを。

一九九九年二月

『アソシエ21』よびかけ人会議

アソシエ21関西へのかかわり

はじめに

今回は、アソシエ21関西への私のかかわりを中心に特集を組んでみました。アソシエ21関西のこの間の記録文書を全て収録することは、分量からいって不可能なので、私がペンネーム（榎原均）で行ったプレ講座のレジュメや資料が中心となっています。アソシエ21関西には、柄谷行人さんやプレ講座を一緒にやった田畑稔さんや表三郎さんもかかわっています。その全体像を把握するために必要な文献は、あとがきで紹介することにしました。

11月7日の関西講演集会には、230名がかけつけ、会場がいっぱいになりました。アソシエ21東京の集まりと違って、若い人達の方が多かったのが印象的でした。アンケートの回答も、運動が、これから昂揚していくことを予感させます。

でも、正直に言っておきますが、60年の安保闘争や70年の安保闘争の前段での運動が昂揚していくイメージとは全然ちがっていて、昔経験した手応えは全然感じられません。ただ一つ言えることは、10年前に作成し、塩見孝也さんの出獄記念集会で、出席者全員に手渡した「緊急の課題」（本特集にも収録）という短い文書について、当時は誰も反応してくれなかったのに、今日では注目してもらえることです。アソシエ21に関係することで、10年前の集会に来ていた人たちとも議論する機会が増えましたが、この点についての手応えは感じています。

私自身、88年の12月にこの文書を作成した後、90年代の10年間を通して、この文書に従って自分の活動を続けてきました。それは、新・旧左翼諸党派の共通の思想の根底的な批判と総括のうえに、次の運動の方向性を提起したものでした。そして、90年代の終わりに、アソシエ21とかかわることで、この10年間の活動の蓄積のうえに、新しい社会運動の行動綱領のイメージをつくることが出来ました。その内容は、京大11月祭で行った講義の、レジュメ後半部分「アソシエ21とは何か」の「私の情況論」で提起してありますので、ここだけは、ぜひお読み下さい。

というように、私にとって、アソシエ21関西へのかかわりは、決定的な転換点となりました。まだイメージは明確ではありませんが、何か大きな運動を形成していけるように思います。それで、読者の皆さんにも、アソシエ21への参加を呼びかけます。

アソシエ21は、学会と同じイメージで、年会費1万円を払えば、毎月のニューズレターと年4回の季刊誌（初年度は2回です。第1号が出ました）が配布され、1万円におつりがきます。関西地域の会員は、そのうえに、関西での独自の活動が可能です。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃ損々」と私の故郷の阿波踊りの文句にもあります。一緒に踊ってみませんか。

連絡先：アソシエ21関西事務局　E-mail:associe@post.sun-inet.or.jp

アソシエ21関西文献解題

1）　4頁　　アソシエ21関西講演集会への招請と協力要請

アソシエ21との私のかかわりは、99年5月29日に情況出版の古賀暹さんと一緒に大阪でトークライブを行ったことから始まりました。この時には、後に、アソシエ21関西の事務局を一緒に担うことになる、空閑明大さんや西嶋彰さん、それに、プレ講座を担当することになる表三郎さんも参集し、古賀さんの方から、アソシエ21関西事務局設立の提案があったのです。そこで、7月23日に、アソシエ21関西事務局を設置すべく発起会を開き、11月7日の関西講演集会と、それに向けてのプレ講座の開催とを決定し、その合意の上に作成されたのが、この文書でした。

2）　5頁　　The Missing Link　　西嶋 彰

3）　6頁　　企業家100名のアソシエ21関西を　　境　毅

関西事務局の活動が始まったものの、11月7日の集会に向けて、どのような組織活動を進めるかは不確定でした。チラシ、ポスター、Eメール、インターネット、マスコミへの働きかけ、こういった方法はもちろん前提ですが、西嶋さんと私で、分担して企業家に呼びかけることにし、それぞれ、呼びかけ文を作成し、大量に配布しました。

4）　7頁　　アソシエ21関西を発足するにあたって　　空閑 明大

5）　8頁　　科学知から文化知へ　　榎原 均

アソシエ21ニューズレターから、関西事務局の空閑明大さんの呼びかけ文とプレ講座の報告とを収録しておきます。三人の事務局メンバーの呼びかけ文から、アソシエ21関西のイメージが描けると思います。なお、私のプレ講座報告文はプレ講座レジュメの前書きとして読んで下されば幸いです。

6）　9頁　　プレ講座 第1回 レジュメ

7）15頁　　PC講座 第2期　第1講・第5講 レジュメ

8）25頁　　70年代の総括と新しい社会運動の展望

9）36頁　　緊急の課題

10）40頁　　脱商品化と脱物象化

プレ講座では「科学知から文化知へ」と題し、1 回目は「貨幣とは何か」について報告しました。レジュメ以外にも、たくさんの資料を付けました。ただし、「文化知の提案」については、本誌 第6巻第6号に出ているし、また、『社会システム研究』 第1号にものせましたので省略しました。

PC講座は、98年の1年間、協同組合運動の現状から価値形態論、さらには現代思想から共産主義論まで、トータルな問題についての講義を目的に開設した私塾で、これをやり切

ることで、従来独りで考えていたときには分からなかった色々なことが、一気に鮮明となり、文化知の提案へと到っています。

『情況』1999年4月号に掲載した「70年代の総括と新しい社会運動の展望」は、今回入力し直しましたが、これは、文化知の立場を、新・旧左翼のメンバーにも理解して頂けるようにという思いで、書いたものです。

「緊急の課題」は、『価値形態・物象化・物神性』をまとめあげた後のインスピレーションをテーゼにしたもので、90年代の私自身の活動方向を決めた文書です。「脱商品化と脱物象化」は、このテーゼを、やさしくかみ砕いたものです。

11）41頁　　プレ講座 第2回 レジュメ

2回目は、「言語とは何か」について報告しました。1回目と違い、2回目は、若い人達が多かったのですが、文化知については若い人達の方が受け入れやすいようでした。

12）47頁　　11．7集会事務局より

11月7日の集会では、田畑稔さんと柄谷行人さんからの基調提起があり、そのあと、伊藤公雄さんの司会で、浅田彰さん、杉村昌昭さん、金時鐘さんが加わり、6名のパネリストによるパネルディスカッションに移りました。この集会については、アソシエ21の方で、いずれ詳しい報告がなされることになっています。それでここでは、この集会に用意した事務局の文書だけを入れておきます。

13）48頁　　京大11月祭参加　21世紀の社会運動の展望

14）57頁　　紹介『価値形態・物象化・物神性』

11月21日に表三郎さんと共催で京大11月祭に参加し、「アソシエ21関西設立記念シンポジウム」を行いました。私が最初に講義を行い、後半は、表さんと空閑さんを交え、三人で鼎談をしました。

講義は、プレ講座を引継ぎ、文化知の方法で、市民社会と国家について考えてみました。そして、シンポジウムでは、レジュメ後半の「アソシエ21とは何か」の内容を話しました。

『価値形態・物象化・物神性』の紹介は宣伝の意味もあって配布しました。ここには、この本の中心的な問題提起をまとめてあります。

アソシエ２１　関西講演集会への招請と協力要請

「新たな世紀へ批判的知性の協働を！」の呼びかけで『アソシエ２１』が結成された。「日本の批判的知性・ラディカルな文化創造のイニシアティブをたがいにうながし、励ましあい、連帯と交流を広げてゆく共同作業へ、知恵と多少の努力とを初心にもどってよせあうことはできないでしょうか。」こんな謙虚な呼びかけがなされたのが今年４月、すでに５００名を越える有名無名の人々が入会を表明し、４月２５日東京で開かれた創立大会には４００名ほどの参加者があった。

呼びかけ人、賛同人の中には５０名近い関西在住者も含まれている。かつて６０年代や７０年代初頭の運動の昂揚期には、大学や職場のネットワークを中心に関西からも状況への発言や参加があった。『アソシエ２１』の結成が、新たな文化状況の再生を目指すとすれば、関西は首都圏というサーバーから情報を供給されるだけの端末であって良いのか、関西の賛同人や新たな参加者の一部が関西事務局、世話人会の結成を表明し、「プレ講座」の開講や「関西講演集会」開催に向けて走りだした。既に４号まで発行されている「アソシエ２１ニューズレター」によれば、全国各地でもこのような取り組みやその胎動が聞こえている。

ソ連や東欧社会主義諸国の崩壊は、資本主義の爛熟や一層の混迷と軌を一にした２０世紀終末のひとつの到達段階に過ぎないにもかかわらず、呼びかけられた「批判的知性」はまるでバブル崩壊や金融危機の共犯者であることを自己確認させられたかのように、ほとんど微塵の単位まで解体され、シニカルに深海に沈潜しようとしている。チラシやポスターや運動組織を通じて集会を呼びかけるといったおおらかで、古典的な手法が通じるのかどうか、われわれ事務局、世話人一同にも不透明で、手ごたえは不確かである。大学や職場やあるいは解体されてしまったつながりを復元する＜場＞の構築から、始めなければならないだろうと何となく予見している。そのための一助として９月１２日から５回の連続プレ講座を準備した。

われわれ関西事務局、世話人会よりもいち早く『アソシエ２１』に馳せ参じた皆さん、あるいは未だ『アソシエ２１』の結成や関西事務局のスタートを知らなかった皆さん！１１月７日、大阪の国民会館ホール（大手前）で開催するアソシエ２１関西講演集会（柄谷行人氏講演他）の成功に向けて、ご助力と周辺への働きかけを期待したい。事務局、世話人会への参加とご連絡をお待ちしている。

７月２３日『アソシエ２１』関西世話人会参加者一同

赤堀　次郎　伊藤　公雄　岩崎　永子　表　三郎　小川　清次
空閑　明大　境　毅　千田　智之　田畑　稔　寺田　道男
西嶋　彰　橋野　高明　吉田　哲夫

新旧老若先輩友人各位

The Missing Link

アソシエ２１へ、沈黙の戦士の復帰を！

例えば１５年の区切りで振り返って見よう。敗戦の１９４５年は明らかに一つの区切りだったろう。１９６０年までの１５年は生きることの模索だ。１９７５年は政治性の一つの終焉だった。１９９０年ソビエトロシアの崩壊。他方で西側経済も爛熟を迎え、以後のバブル崩壊の後始末とカジノ資本主義の跳梁は目に余る。１９９９年の今は何の時代なのか？世紀末？確かに西暦のミレニアムは替わる。２０世紀という時代意識から見れば、人によりさまざまな感懐もあろう。

２０世紀の後半は科学技術の目覚ましい発展の一方で、さまざまな社会システムが制度疲労を起こし崩壊寸前の有り様だ。この時代はある意味で学校と株式会社の時代だった。その前の国家と軍隊の時代に比べると、人はそれらに主体的に帰属し、それなりの自己満足を得ている。少なくとも軍隊がなし得なかった世界に覇を唱えるという野望を、ＧＤＰや債権金満国という点で達成しているのだから、日本にとってなかなか効率的なシステムであったことは確かだ。恐らく、その成果も１９７５年を中仕切りとした前半と後半の各１５年間の日本のなりふり構わぬ経済競争の元利合計だ。人により差があるとしても、学校と株式会社と言われてしまえば、前半にしろ後半にしろアリバイ（不在証明）を主張できる人は少なかろう。もちろん、恥知らずに積極的な関与を主張する人がいるなら、それはそれでよい。

１９９０年を境に何かが変わった。東西冷戦の終結、イデオロギーの終焉。ついでに成長神話や近代におけるさまざまな安全神話にも疑問符がついた。この時代をどのようにドライブするのか。１９７０年以後の後半を時代の追随者としてすごした人々は、勝利でも敗北でもないような宙ぶらりんの中で空疎な沈黙に自足し、ペナントレースを投げた阪神ファンのように虚しい冷笑を浴びせるだけなのか。

たとえあなたはもう良いとして、若者達のあり様を見よ。弟や妹、娘や息子、われわれの血を引いた後輩たちの虚無の深さを。我々は、後輩たちのこんな有り様にまでアリバイを主張できるのか。何かが失われている。気恥ずかしい正義を言わないとしても、明らかな不正義や時代の逆行に＜不承知＞と言う知性のつながりが。Missing Link－失われた連鎖。時代をつないで行く環を失って、われわれはどのような２１世紀を夢想するのか。

失われたものの一つは言葉。哲学と政治と思想。請求書と領収書、見積書と成長率しか語らなくなった言葉。家庭も学校も職場も言葉を語る場ではなくなった。言うまでもなく、失われたのは人と人の関係。怒らず、争わず、悲しみもしない。傷つけあうこともなく、深く傷ついて行く孤独な沈黙の戦士たち。

Missing Link、失われたのはあなた自身。

学校と株式会社に替わる学習と労働の場の創造を。

若者たちに、未来を語る言葉を伝えたい。

１１月７日アソシエ２１関西講演集会に集まれ。アソシエ２１への参加を。

西嶋彰

企業家100名のアソシエ21関西を

アソシエ21関西事務局　境　毅

私はフォーラム90ｓには参加する気持が全然起こらなかった。元活動家と現役活動家たちが集まって討論したところで何も生まれないと考えていたし、本当に意味のあることは、未耕地を開拓し、そこに種をまき、新しい運動を育成することで、このことに力をさくべきだと思っていたからである。

あれから10年、フォーラム90ｓは解散し、あとにアソシエ21の呼びかけが発せられた。未耕地を耕し、多少の収穫をあげられるようになった私にとって、アソシエ21には開かれたイメージがあった。自分自身の発言も可能ではないかと感じていた。

私は93年に友人たちと『ＡＳＳＢ』誌を発刊し、21世紀の社会運動の展望を共同して解明していくネットワークづくりを構想していた。私自身の力不足で、独力ではこの試みは未だ実を結んでいないが、アソシエ21の呼びかけは、外からこのネットワークが与えられたように私には思われた。

一寸したことがきっかけで、アソシエ21東京事務局から、関西事務局をつくらないか、という要請があったとき、私は友人をさそって参加することにした。

事務局活動を開始して驚いたことは、アソシエ21創立集会での柄谷さんの講演の内容であった。それは、Ｇ－Ｗ－Ｇ´という資本の自己増殖の過程にあって、流通過程こそが剰余価値の実現の場にあり、労働者が消費者として買い手の立場に立ったとき、剰余価値を無化する主体足りうる、という見地からの消費協同組合の位置づけであった。柄谷さんによれば、消費協同組合は、生産点ではもはや主体たりえない労働者が主体として登場し得ることで、国家と資本に対抗する運動たりうる、というのである。

この考えについて私見を述べれば、現実の協同組合は、それ自体ではもちろん柄谷さんが期待しているような国家と資本に対抗する運動体として存在しているわけではない。このことは柄谷さんも了解ずみだろう。しかし協同組合をとりまく環境が変ればそれは間違いなく資本家的生産のオルタナティブとして機能しうる存在である。問題は協同組合自身にではなく、それをとりまく環境にある。

柄谷さんは自らの見解に到達したのは昨年の８月だったと述べている。だがその変化は、単に柄谷さん個人に起きただけでなく、恐らく日本の住民の何％かに突然訪れたものだろう。実際私たちもすでに協同組合を次世代のシステムと捉え、これについて研究することを目的に社会システム研究所を３年前に発足させ本年６月には紀要を発刊している。

協同組合をとりまく環境とは企業社会と公的セクターである。ここに変化が訪れており、この変化を大きい流れにしていくことが問われている。そこでとりあえずアソシエ21関西に企業家100名が加わればどうなるだろうか。商都大阪からの発信にこれほど似合うことは他にはないのではなかろうか。

自力では何ともならない協同組合、時代の動向を鋭敏につかんだ知識人、これはすでに存在している。企業家が登場し、三者のネットワークが形成されれば21世紀の新しい社会運動がそこから始まるのではなかろうか。来れ「企業戦士」たち、本当の「戦場」へ。資本に奉仕する働き方だけではなく、「自己価値創造」（ネグリ）の働き方をつくりだそう。

（'99. 10. 24）

アソシエ21関西を発足するにあたって

空閑明大

『世紀』という年代表記に別段意味合いを感じることもないのだろうけれども、この一〇年間をふりかえれば『世紀末』と呼ぶにふさわしい一〇年間であったような気がする。世界大の出来事から個人的な出来事まで、よくもまあ何もかもが末期的な雰囲気を醸しだしてくれるものだと感心してしまうほどだ。社会主義、マルクス主義を標榜する国家制度や党派、集団から、勝利を謳歌したはずの世界資本主義のシステムそのものの機能不全（通貨金融システムはもちろん生産力の発達そのものがもたらす矛盾という相変わらずの問題まで、資本主義は矛盾の先送りを消費欲求のコントロールなどを通してかろうじて為し得ているというふうにしか私には思えない）に至るまで、もはや旧来の「かたち」や手法を保持したり、用いることができない、ということを思い知るには十分すぎるほどの出来事に直面してきた。にも拘わらず、こういう情勢に有効に対応することのできない私（たち）の問題そのものをも考えない訳にはいかない。アソシエ21に寄せる期待のようなものがあるとすれば、それぞれの経験や立場、考え方、作法の異なる人々の多様性とその協働が産出するのではないかと思えるもの、効用への期待にほかならない。私（たち）が関西地区においてアソシエ21の呼び掛けに呼応して活動を開始しはじめた動機もそんなところにある。

個別的課題や情勢分析の一致、戦略戦術上の一致に基づく政治的統一行動は、その基盤根拠の変動によって容易に転換できる。政治のもつ妖しさ、いかがわしさの原因はそんなところにあるのではないか。左翼の文化性、文化的なことへの着目は、これまではそうした政治に従属するものとしてのそれであった。文化政策、闘争の本当の眼目は、利害や力関係、政治的確執によっては妥協や改変が不可能な領域としての文化の絶対非和解性があたらしい社会革命の根拠になりうるのではないか、という点にあるような気がする。結成集会で柄谷氏が指摘した「経済的基盤と倫理」と共に、文化を産出更新する能力を付け加えておきたい。もちろん、ブルジョア文化に対するプロレタリア文化などというドグマとは関係のない人間社会を構成しうる自己産出性の領域における文化、といったものを構想している。

アソシエ21関西事務局／世話人会の初動は自らの動機と根拠への問いかけであり、そのことによるなんらかの波及力への期待の表明にすぎないかもしれない。プレ講座から一一月七日関西講演集会への流れをどのように形成することができるか、一人でも多くの有志とともに試みてみたいのですが……。

（アソシエ21関西事務局）

アソシエ21関西プレ講座の報告

科学知から文化知へ

榎原 均

関係としてある世界を、主体と対象とに区分し、対象の法則を分析、総合して記述する科学の方法については多くの批判がなされています。だが私が優れた批判だと考えているハンセンにしても、既成の科学知の相対化に終わり、新たな知見をもたらしていません。

私は、科学知が、人間にとって身近なものである商品、貨幣や、言語や国家について、確実な知識をもたらしてはいないことに注目しました。これらはいずれも人間の社会関係ですが、この関係にあっては科学知により、「主体」とみなされる人間自身が関係の内にあり、そして科学の方法により「主体」と「対象」をとり出すことで、現実の社会関係そのものは視界から消してしまうのです。

このように、方法上の制約から、科学知には手に負えない領域についての新たな知の創造の試みが、マルクスの価値形態論でした。マルクスが価値形態の解読に用いた方法を抽出し、これを言語の解読に生かせないか、これがプレ講座での文化知の実践でした。

マルクスが価値形態の秘密として明らかにしたものは、等価形態にある商品は、その使用価値がその反対物である価値の化身とされており（物象化）、その結果、使用価値自体に購買力がそなわっているかのように見える等価形態の謎性（物神性）が生じることでした。

言語についてはソシュールが言語名称目録観の批判を行い、丸山圭三郎がそれにもとづいて言語のフェティシズムの批判を行いました。しかしこれは不十分でした。言語を対象化された意識と捉え、ソシュールが発見した言語記号の二重性に関して、価値形態論の方法を利用して、名づけについての言語記号と指示対象との間の超感性的な現象形態を想定したとき、指示対象が対象化された意識としてある概念の化身とされていることが導出されます。そうすると、人間が名づけを行う限り、指示対象そのものに概念を生成する力がある、という言語名称目録観を頭の中に生成させることがわかります。

これが言語のフェティシズムに他なりませんが、このことが解明されると、科学知の方法が、実はこの言語名称目録観のうちでしか成立しえないことが判明します。紙数がつきたのでまたの機会にお目にかかりましょう。

（九―一〇月、計五回の「アソシエ21関西プレ講座」は一〇月二四日をもって無事終了。目下、一一月七日の関西講演集会へ向けて最後の追い込み）　（アソシエ21関西事務局）

「科学知から文化知へ」
（第1回 貨幣とは何か）

1999.9.12　榎原 均

はじめに

貨幣をどう捉えるかには色々な切り口がある。日銀券を見て、これは１万円という額面の価値がない、ということについて考えている人（岩井克人）もいるし、マルクスの『資本論』にしたがって「貨幣論」の体系を講義している学者もいる。また最近は外国為替取引が架空資本の売買としてなされ、投機が取引の太宗をなすようになっているが、この辺になるときちんとした説明すらなされていない。

色々な切り口のうち、今回は、貨幣に人を支配する力がある、という事実について考えてみたい。このことが明らかにされると、他の切り口についての理解も進むと思う。

Ⅰ）文化知への招待

1）お金（貨幣）についての日常意識

（1）人を支配する魔力をもつ

・文学、シェイクスピア『アセニズのタイモン』

「黄金か。貴い、キラキラ光る。黄色い黄金か。いや神さま！　私はだてにお祈りしているんじゃないよ。こいつがこのくらいあれば黒も白に、悪も善に、老も若に、臆病も勇敢に、貧賤も高貴にかえる。」

・宗教、ひろさちや『お金ってなんだろう』（すずき出版）

「貨幣のうちに、人間を愚かで、狂的な行動に駆り立てる魔力が潜んでいるのだ。……じつは、そのお金の魔力から人間を解放し、自由にするために、宗教がある。」（11～15頁）

（2）商品交換のための媒介

・国語辞典

「商品交換の媒介物で、価値の尺度、支払手段などとして社会に流通するもの。本来はそれ自身が交換されるものと等価な商品で、昔は貝殻・獣皮・宝石・布・農産物など、のち金・銀を用い、さらに現今では、法律によって強制通用力を認められた信用貨幣即ち金貨・銀貨・白銅貨・銅貨・紙幣の類を意味するようになった。」（『広辞苑』岩波書店）

2）文化知から見た貨幣

（1）文学、宗教と科学の裂け目

日常的意識のなかで人々が感じているお金の魔力を科学では解明できていない。

（2）忘れられたマルクス

・商品の物神的性格とその秘密

何故お金が魔力をもつかを明らかにしているが、しかし、今日の経済学に生かされていない。

「正直言って、いまもって『お金って一体なんなの?』と聞かれると、とまどってしまう。」(佐伯啓思、前掲『お金ってなんだろう』148頁)「科学も解答をだせないし、哲学も解答をだせない」(223頁)「お金とはなにか、という問いに対する正解などない。」(224頁)

・科学知の限界

今日の科学や哲学を科学知として一括してみると、その方法上の限界から裂け目が生じている。この裂け目に住んでいるマルクスは忘れられる。

(3) 科学知から文化知へ

・近代科学批判の方法

科学に対してオカルトや宗教を対置するのではなく、新しい科学を打ち立てる試みとしての現象学、共同主観性で人間の社会関係が解明できるか。

・裂け目のマルクスを救出する。

マルクスの価値形態論の方法をとりだし、その方法で、他の社会関係(言語、意識、国家など)を解明できないか。この領域にある知の形態を文化知と呼ぶ。

・文化知を創造するサロン

文化知は今日の生活様式(生産も含めた)に代わる「もう一つの生活様式」によって発信される。

3) 身近なものがわかっていない。

(1) 商品、貨幣とは何か

私的労働の社会的形態だが、このことがきちんと捉えられていない。人々の社会的関係を解明する方法が明らかではない。

(2) 言葉とは何か、思考とは何か

関係としてある社会的意識も解明されていない。

(3) 政治や宗教もわかっていない。

政治は支配・隷属の関係であり、宗教は幻想の関係。

(4) 社会的関係がもつ支配力

社会的関係はそれ自身の内容とはかかわりのないサインを出しており、人間はそのサインを読みとって社会的関係に順応している。

身近なものの支配力と、それに支配されることで人がもつ意識形態による支配という二重の支配にとらわれている。

(5) イデオロギー批判の限界

だから虚偽意識(イデオロギー)を批判しても、身近なものの支配力はそれとして続き、こうしていったん批判し克服されたイデオロギーが再生されてしまう。

(6) 文化知の課題

文化知は単なるイデオロギー批判にとどまらず、社会的関係がもつ支配力を弱めていく実践と一体化している。

Ⅱ) 文化知の方法

1) 人間の社会関係とは超感性的な現象形態である。

関係と両極、目に見える両極が関係のなかで新しい役割をもつ。とり違えの必然性。転倒は関係の産物だが、関係そのものは目に見えず、見えるものは関係の両極を占めるものだけ。

2) 関係としてしか存在しない実体の発見。

異なるものの関係における同一性、社会的実体。

3) 形態規定

両極が超感性的な現象形態としてあらわれて、二重物となる。ある物が社会的に形態規定されて別の超感性的な内容を表現する。

4) 回り道の構造

自然発生的な社会関係にあっては社会性は回り道をして表示される。

5) 思考の論理と存在の論理

思考の場合分析による抽象化で対象を多様な規定に還元する。これを上向的に総合し、思考のうちに多様な規定の統一としての概念を得る。

存在にあっては関係(総合)のうちに抽象がなされている。判断は自然物を形態規定し、記号とすることで提示される。

6) 類と個の転倒

思考にあっては個物のみが実存し、種や類概念に当るものは個物としては存在しない。

存在する関係にあっては、具体的な個物が一般的で類的なものの実現形態とされる。これが自然物が社会的属性をもつ根本的要因。

Ⅲ) 文化知の方法の導出、あるいは価値形態論を読む。

1) 簡単な価値形態の論理構造

20エルレのリンネル=1着の上着

(1) 日常意識

売り手と買い手、という人間を想定する。リンネル生産者が、上着となら自分の商品と交換してもいい、という欲望表示の関係。その結果、上着の所有者は無条件でリンネルを買える。上着の所有者に購買力はあるが、リンネルの所有者には相手次第でそなわっていない。

(2) マルクスの読み

リンネルは「自分に等しいものとしての他の一つの商品、上着に関係している」

関係は区別(差異)と同一性を表わしているが、区別(リンネルと上着という物体の差異)は感性的に捉えられるが、同一性はわからない。リンネルと上着が同じものだって?

リンネルは自分の価値という社会的なものを、自分の価値に等しいものとしての上着に関係することで上着を自分の価値形態とし、自分自身と関係する。この場合の同一性は単なる共通性ではない。関係のなかで成立する同一性であり、抽象的人間労働といっても思考産物(共通性としての同一性)ではなく、社会のなかで成立している同一性であり、社会的実体である。

（3）文化知の方法

リンネルの価値は上着との関係で超感性的な現象形態をとる。上着は使用価値としての上着の他に、価値（社会的労働）の化身とされている。

異なるもの、リンネルと上着との関係における同一性は、双方に共通なものとして思考が固定できるものではなく、社会のなかで成立している実体、まぼろしのような対象性である。

上着はリンネルによって形態規定され、等価物＝価値の化身とされているが、これは感性的には捉えられない。

2）価値形態の発展

（1）ＰＣ講座第２期第５講レジュメより

・３頁のＢ）

簡単な価値形態にひそんでいた価値形態の秘密が開示される。

第Ⅰ形態ではまだ社会関係とはいえないが、第Ⅱ形態だと社会になっている。

第Ⅲ形態では社会は統一的な秩序をもち、全ての商品がお互いの価値を表現しあえる。

（2）交換過程と貨幣の生成

・４頁

商品所有者は商品の本性に従い、第Ⅲ形態を実現すべく、無意識のうちで本能的に共同行為をする。商品所有者が自分の商品に価格をつける行為が、実は金を貨幣にする共同行為への参加なのだが、このことは意識されない。

3）物象化とは何か

（1）人格の物象化と物象の人格化

・意志支配

商品所有者は商品に意志を宿し、商品の本性に従って行動することで貨幣を生成した。

・貨幣の物神性

商品所有者の共同行為が金を貨幣（全ての商品が買える）にしているのに、この購買力が金にそなわっているかのように見える。

（2）物象の概念的構造

・思考、判断、意志

意志を宿せるためには物象は思考の機能をもち、人間にサインを送ってその判断を伝えなければならない。

・商品の思考の機能と判断

諸商品は価値形態にあっては、お互いにその自然的物質性を抽象しあっている。かつ商品の価値の大きさは等価商品の商品体の数でもって表示される。商品は思考の機能をもち、判断を提示している。

・物象に意識を宿す

物象の身になって考える、ということではなく、「考え」て判断を提示している物象に意志を宿すこと。これは物象による人格の意志支配であるが、人間はこれを自然法則への順応と同じものと考えてしまう。

Ⅳ）文化知の課題

1）関係をどう捉えるか

・見えるものと見えないもの

（観　測）	質量	価格	意味
（見えないもの）	重力	価値	意識
（見えるもの）	物体	使用価値	文字

・関係と両極

ヘーゲル『エンチクロペディー』（河出書房新社、253頁）

「両極は、一本の実在的な線の感性的に現存する両端である。しかしこれらの極は、極としては、感性的な、力学的な実在性を持たず、観念的な実在性をもつ。これらの極は分離することが全く不可能である。」

※ヘーゲルは目に見えるものが、関係の両極におかれると目に見えるものとしてではなく、超感性的な実在となることに気づいていた。

・関係の論理学（反照論）

ヘーゲル（前掲書、131頁）

「両者がそれぞれ自分は他者ではないという形で向自的にあるのだから、両者はそれぞれ他者の中で照り返しており、他者があるかぎりにおいてのみあるのである。したがって本質の区別は対立措定であり、これによれば、区別されたもの（両者）は決して他者一般を持つのではなくて、自分の他者を自分に対して持つのである。両者はそれぞれ自分の独自の規定を他者へと反照させられているとき、じつはただ自己へと反照しているにすぎない。そしてその他者もまたこれと同じことをしているのである。このように、両者はそれぞれ、他者固有の他者なのである。」

※ヘーゲルは関係のなかにある他者とは、自分に対して持っている自分の他者であり、自分は他者へと反照させられているとき、実はそれは自分が自己へと反照しているにすぎず、そして、他者も同じことをしていることを見抜いている。この反照の関係が超感性的であり、他者への反照は、他者を感性的な実在性から観念的な実在性へと転化するのである。

・関係とは何か

マルクス『資本論草稿集』（４巻、116頁）

「諸関係というものは、総じて、それらが、たがいに関係しあっている諸主体から区別されて、確定されねばならないとされるばあいには、ただ思考されることができるだけだからだ。」

※諸主体は見えるもの、思考によってしか捉えられないものは見えないもの。

2）文化知から見た貨幣論の意義

・無意識のうちでの本能的共同行為による貨幣生成

従来の社会革命論の限界の克服が可能となった。

プロレタリアート独裁の国家によっては商品、貨幣はなくせない。脱商品化は狭い領域でしか実現できない。

脱物象化の観点から、政治権力を奪取して資本家階級を収奪する、という従来の革命の戦術に代わるもう一つの社会革命の戦術を提出。市場流通に代わるもう一つの流通、賃労働に代わるもう一つの働き方。

生活に根ざした知としての文化知の創造がいま問われている。

3）脱商品化と脱物象化

別紙

V）貨幣を文化知で捉えるとどうなるか

1）目的意識性について考えなおす。

（1）マルクス主義の場合

階級意識を社会についての批判的理性に置いていた限りで、無意識のうちでの本能的共同行為を無にしていく方向性が出せなかった。

（2）市民運動の場合

今日の社会が生み出している諸悪に対して市民として異議申立をする際、やはり科学的理性で持って目的意識を形成していた。自分たちのわかっている事を他人は理解していない、という意味で運動に参加しない人たちを遅れた人たちとみていた。

（3）対抗文化運動（新しい社会運動）

市場が生み出すイデオロギーとは別の価値観で集まって新しい経済システムを形成しようとしてきたが、たえず市場から侵食されている。

2）指導から媒介へ

（1）目的意識性はバラバラでよい

この世の中の貨幣というシステムが理解できれば目的意識性はバラバラでも共鳴しあえる。目的意識性やイデオロギーや価値観で、人を獲得する必要はなく、お互いの多様性を活かしていくことを考えればよい。

（2）文化知創造のネットワーク

人々のあらゆる社会関係についての新しい知の形態をそれぞれが共同して創造していくネットワークづくりとしてインターネットを利用する。

（3）社会を変える力は重力的に作用する

脱物象化への力は各々のベクトル（目的意識性）の合力ではなく、各々が意識していない力にもとづく。

PC講座第2期第1講レジュメ

'98.3.7.

物象化と物神性、近代の宗教の秘密

A）第2期のキーワード

1）転倒、またはとり違え

（例）使用価値が価値の現象形態となる。
自然物が社会を代表する。

（ポイント）転倒は関係の産物だが、関係そのものは現象せず、現象するものは関係の両極を占める自然物だけ。

2）回り道の構造

（例）等価商品を価値の化身とし、そうすることで回り道をして、自分の価値を表現する。

（ポイント）現代社会の構造における原理。宗教、国家、市場などは、何らかの媒介者を必要としている。媒介者が不可欠であれば、その社会は回り道の構造をもつ。

3）関係の論理学は未完成

マルクスの形態規定論で反照の論理学を仕上げること。弁証法の完成。

4）存在と思考の根源的他者性

現代哲学は、何らかの形で実践を問題とせざるをえなくなっている。ハイデガーの世界内存在や、ウィトゲンシュタインの言語ゲームなど。しかし、関係の論理学なしに実践はつかめない。現代哲学は思考における武器（論理）をもてずに思いつきが展開されているにすぎない。

関係の論理学は、存在と思考とが根源的な他者たることを示す。その基本内容は抽象における分析と綜合とのちがいにある。

5）意識形態の批判

知の形態が科学としてあることの批判は知の形態を文化とすることでなければならない。その際の文化は脱物象化の文化。

B）『資本論』の商品論の骨子

1）商品の二要因、使用価値と価値

●使用価値　ある物の有用性はその物を使用価値とする。
●価値　ある物の他の物との間の交換関係としてあらわれる。
●二つの商品の交換関係
一クォーターの小麦＝aツェントネルの鉄
●共通な第三者の導出
抽象的人間労働は社会的実体。価値の実体としての労働＝労働価値説
●方法
分析的抽象、思惟抽象、思考産物としての価値

●批判
価値の大きさは商品に含まれる労働量と見なせるか。
蒸留法による価値実体の導出は正しいか。
労働は価値の実体と見なせるか。

2）商品で表示される労働の二重性
●具体的有用労働
使用価値をつくる労働
●抽象的人間労働
商品価値を形成する労働

3）価値形態または交換価値
●商品は二重の形態をもつ
自然形態と価値形態
使用対象であると共に価値の担い手
●簡単な価値形態　（第Ⅰ形態）
相対的価値形態と等価形態
価値関係の両極
●全体的な価値形態（第Ⅱ形態）
価値が無差別な人間的労働の凝結として現象している。
●一般的な価値形態（第Ⅲ形態）
全ての商品が一つの社会的関連の下におかれている。
●初版本文第Ⅳ形態（第Ⅳ形態）
全ての商品が自己主張することで、統一的な社会的関連は破壊される。
●貨幣形態　　（第Ⅴ形態）
一般的等価物が特定の商品に固定される形。

4）価値形態の発展
第Ⅰ形態
20エルレのリンネル＝１枚の上着
第Ⅱ形態
20エルレのリンネル＝１枚の上着
＝10ポンドの茶
＝４ポンドのコーヒー
＝……
第Ⅲ形態
１枚の上着　＝ ｝20エルレのリンネル
10ポンドの茶　＝
４ポンドのコーヒー＝
……　＝
第Ⅳ形態
20エルレのリンネル＝１枚の上着
＝10ポンドの茶
＝４ポンドのコーヒー
＝……
１枚の上着　＝20エルレのリンネル
＝10ポンドの茶
＝４ポンドのコーヒー
＝……
10ポンドの茶　＝20エルレのリンネル

＝１枚の上着
＝４ポンドのコーヒー
＝……
＝……
第Ⅴ形態
20エルレのリンネル＝ ｝２オンスの金
１枚の上着　＝
10ポンドの茶　＝
……　＝

5）交換過程
●交換過程の矛盾
「もっと立ち入って注意してみると、どの商品所有者にとっても、他人の商品はいずれも自分の商品の特殊的な等価として意義をもつものであり、したがって、自分の商品は他の全ての商品の一般的な等価として意義をもつ。だが全ての商品所有者が同じことをするのだから（第Ⅳ形態）、どの商品も一般的な等価」物になれない。
●はじめに行為ありき
考える前に行動した。「商品本性の諸法則が、商品所有者たちの自然本能において自らを実証した」
無意識のうちでの本能的共同行為。「他の全ての商品の社会的行動が、それらの商品が自分の価値を全面的に表示するための、ある一定の商品を排除する。」
貨幣の生成。

C）いま何故宗教か

1）中世の宗教意識
近代までは、宗教が知の第一級の形態であった。中世の大学では神学が教えられた。
●トマス・アクィナス
人間の認識能力を超える神の教えは、理性ではなく、信仰によってこれを受け入れるべきである。
人間の全ての認識は神の知を最高の知恵としてそれによって秩序づけられている。
●デカルト
近代科学の創始者の一人とされているデカルトですら、数学的真理の背後に信仰を置いた。

2）フォイエルバッハの宗教批判
●人間の本質
類を形成するもの、理性・意志・心情、これらは個を超えた神的な力である。
●宗教の本質
神とは人間の最も主体的で最も固有な本質が分離されたもの。人間の自己疎外としての神。
●宗教の真実でない本質
神は全ての疑いを解く無知である。
神の啓示も人間的欲求によって発生している。人間は神を立てることで回り道をして自分自身に帰ってきている。
信仰は人間を制限し、局限する。信仰は人間から他のものを相応に評価する自由と能力とをうばいとる。
●宗教批判の方法

宗教が手段とするものを目的とし、目的とするものを手段とすること、宗教的関係を転倒すること。

3）マルクスの宗教批判
●宗教に対する批判は、フォイエルバッハで終わっている。
●国家や市場の宗教的構造の批判へ。転倒したものである宗教が存在しうるのは、社会が転倒しているから。商品、貨幣、資本の批判へ。

4）オウム真理教の時代
●宗教のビジネス化
幸福の科学、創価学会など
●密教の再生
何らかの神秘体験を獲得させることで奇跡を信仰させる。
キルケゴール「無限の諦めは、信仰に先だつ最初の段階である」
諦めの時代としての現代は、宗教の華ざかりとなった。

5）現代における宗教批判
●生き方がテーマに
脱物象化の文化運動を、もう一つの生き方として実現すること。メルッチの「新しい社会運動」の本当の意義。

D）マルクスのフェティシズム論

1）現象形態と幻影的形態
●物象化と物化、SacheとDing
現象形態＝物象化。ただしこれは超感性的な現象形態でこれが幻影的形態＝物化をともなう。

2）価値形態の秘密と謎
価値形態の秘密＝とり違え。使用価値が価値の現象形態となる＝物象化の原理
等価形態の謎性＝物化＝フェティシズム、自然物がそのままで社会的なものの化身となっている。この場合、その社会性が自然物にもとからそなわっているように見える。

3）商品世界の宗教的構造
とり違え（転倒）と回り道がある商品世界では、自然物に社会的な力をのり移らせてしまう。
自然物（金）に社会的な力（購買力）がどのようにしてのり移ったか、これがマルクスのフェティシズム論のテーマであった。

ＰＣ講座第２期第５講レジュメ

'98.5.16.

価値形態の発展

A）簡単な価値形態の論理構造（前２回のテキストのまとめ）

1）価値関係の形成（20エルレのリンネル＝１着の上着）
●関係するとはどういうことか。
異なるものが等置されている関係にあって、同一なものの潜在を読みとる。
「自分に等しいものとしての他の一つの商品、上着に関係している」
関係は区別と同一性とを表しているが、それが思考の場合のように、二つの論理として表されているのではなく、一つの関係で示されているから、解読が必要となる。
●関係で示される同一性の質
関係にあっては区別は関係の両極で示されている。次に同一性については、質に関する限りは、思考によってつきつめることができる。さきに価値実体の分析がなされ、抽象的人間労働が、同一性の質であることが明らかにされていた。
●関係で示される同一性の存在様式
リンネルは、異なるものとしての上着に関係する際に、自分に等しいもの（抽象的人間労働の産物）としての上着に関係している。

2）リンネルにとっての関係の意義
●価値としての自分自身に関連
価値は社会的なものだから、単独では示せない。
●使用価値としての自分自身から区別
使用価値としては単独で示されているが、そのリンネルが単なる使用価値ではないことを示している。
●リンネルは自分に価値形態を与えている
リンネルは使用価値としては生まれながらの形であるが、それが上着と関連することで、もう一つの形である価値形態をもつ。

3）上着にとっての関係の意義
●直接的交換可能性の形態
リンネル価値が上着で表現されることによって、上着はリンネルと交換可能なものとなる。上着という自然物が等価物という社会的な力（交換可能性）をもつものとなる。

4）同一性（価値）の質の存在様式
●分析的抽象による質の発見
個々の商品を労働生産物へと還元し、同一性の質を抽象的人間労働とすることによって得られるものは思考産物である。
●諸商品の物象的関連のなかでの質の同一性
リンネルの価値は支出された労働の単に対象的反射だが、それはリンネルの物体

において反射されるのではなく、上着に対するリンネルの価値関係で顕現する。

5）質の同一性様式と形態規定

●形態規定

上着はリンネルと同じ質のもの、つまり抽象的人間労働の物質化したものとされるが、しかし上着で表されている労働は具体的な有用労働である。ここでは具体的有用労働の産物たる上着が抽象的人間労働が物質化したものとみなされる。これが形態規定でこれによって上着がもう一つの役割を与えられる。

だから、リンネルが上着との関係で価値を表現するとき、リンネルは抽象的人間労働の直接的実現形態として意義をもつ具体的労働上着に連関しているのである。

6）同一性（価値）と差異（使用価値）との反照

●思考の場合

同一性も差異も分析によって抽象された抽象的な対立物で、おのずから区別されている。

●商品の場合

差異を示す使用価値が同一性たる価値の現象形態となる。価値と使用価値はお互いに分かれるのではなく、互いに反照しあっている。

●形態の二重化

反照がおこるのは形態を二重化するから。感性的な形態に超感性的な形態が同時に含まれている。

反照は社会関係につきもの。社会関係において感性的に捉えられる両極の間に質の同一性を示す超感性的現象形態を発見し、形態規定の内実を明らかにして、自然物の社会的役割を解明すること。これが綜合による抽象という存在の概念的構造についての了解の方法である。

これは構造主義のように、モデルを立てるのではなく、個々の社会関係における同一性の質の究明から、形態規定の内実をひとつひとつ具体的に解明していくことを要求する。

7）綜合による抽象の世界

●類と個の関係の転倒

思考にあっては対象についての分類における類の概念は抽象的であり、個の概念は具体的である。ところが綜合による抽象がなされている反照の関係にあっては、個物としてある具体的なものが、抽象的なものである類の化身とされている。その結果、ここでは類的なものが具体的な個物として存在していることになる。

●回り道

形態規定は媒介による回り道を含んでいる。回り道をしない社会性は可能だろうか。

8）価値形態の秘密

●久留間説

「商品の価値がその商品に等置される他商品の使用価値で一つまり価値の正反対物で一表現されることにある。」

●武田説

「一商品の使用価値が価値形態となることによって、他商品の価値の現象形態として役立っていること。」

●マルクス

「使用価値上着がリンネル価値の現象形態になるのは、ただ、リンネルが抽象的人間労働の、つまりリンネル自身のうちに対象化されている労働と同種の労働の、直接的物質化としての上着物質に連関しているからにすぎない。」

B）商品の価値形態の発展（初版本文の場合）

1）第Ⅰ形態

20エルレのリンネル＝1枚の上着

「すべての価値形態の秘密は、この簡単な価値形態のうちにひそんでいるにちがいない。」

2）第Ⅱ形態

20エルレのリンネル＝1枚の上着
＝10ポンドの茶
＝4ポンドのコーヒー
＝…

「ここではリンネルの価値がはじめて真に価値として、すなわち人間労働一般の結晶として示されている。」

3）第Ⅲ形態

1枚の上着　＝
10ポンドの茶　＝
4ポンドのコーヒー＝
…　＝
} 20エルレのリンネル

「上着をすべての他の商品にたいしても価値として示しており、したがってまた、それは上着の普遍妥当な価値形態なのである。ただ上着だけでなくて、コーヒー、鉄、小麦、要するにすべての他の商品が、それらの価値をいまではリンネルという材料で表現している。こうしてすべての商品が互いに自分を人間労働の同じ物質化として示している。」

「リンネルはすべての他の商品にとっての等価物の類形態として現れる。…」

一般的な等価形態にある商品は、相対的価値形態からは除外される。

4）第Ⅳ形態

20エルレのリンネル＝1枚の上着
＝10ポンドの茶
＝4ポンドのコーヒー
＝…

1枚の上着　＝20エルレのリンネル
＝10ポンドの茶
＝4ポンドのコーヒー
＝…

10ポンドの茶　＝20エルレのリンネル
＝1枚の上着
＝4ポンドのコーヒー
＝…

「どの商品でもがそれ自身の現物形態をすべての他の商品にたいして一般的な等価形態として対立させるとすれば、すべての商品がすべての商品を一般的な等価形態から除外することになり、したがってまた自分自身もその価値の大きさの社会的に認められる表示から除外することになる。」

5）交換過程

商品と所有者、「商品は物であり、したがってまた人間にたいして無抵抗である。…これらの物を商品として相互に連関させるためには、商品保護者たちは、自分の意志をこれらの物に宿す人格として、相互にふるまわねばならない。」

交換過程の矛盾、「諸商品は、それらが使用価値として実現されうる前に、価値として実現されねばならない。他方では、諸商品は、それらが価値として実現されうる前に、使用価値として実証されねばならない。」

「どの商品所持者にとっても、他人の商品はどれでも自分の商品の特殊的な等価物とみなされ、したがってまた自分の商品はすべて他の商品の一般的な等価物とみなされる。ところが、すべての商品所持者が同じことをするのだから、どの商品も一般的等価物ではない。」

→これは第Ⅳ形態を念頭においている。

「はじめに行為ありき。彼らは考えるより前に、すでに行っていたのである。商品の本性の諸法則は、商品所持者たちの自然本能において自分を実証している。彼らが自分たちの商品を互いに価値として関係させ、したがってまた諸商品として関係させることができるのは、ただ、彼らが自分たちの商品を一般的な等価物としてのなんらかの別の商品に対立的に関係させる、ということによってのみである。このことは商品の分析によって明らかにされた。しかし、ただ社会的な行為だけが、ある特定の商品を除外して、この商品においてすべての他の商品が自分たちの価値を全面的に表すのである。このことによって、この商品の現物形態は、社会的に認められた等価形態になる。一般的な等価物であるということは、社会的な過程によって、この除外された商品の独自な社会的機能になる。こうして、この商品は一貨幣になるのである。」→商品（物象）による意志支配＝物象化。

6）貨幣形態

20エルレのリンネル＝
1枚の上着　＝
10ポンドの茶　＝
…　＝
} 2オンスの金

7）価格形態

20エルレのリンネル＝5万円

C）物象化とは何か

1）貨幣の生成とは

●貨幣生成の共同行為とは何のことか

商品生産者が自分の生産物に価格をつけること。この行為が、実は全ての商品所有者が自分たちの商品の価値を貨幣金で表現する、という貨幣生成の共同行為への参加なのだ。

●この共同行為は意識されていない

商品所有者は、自分の商品に価格をつける、という意識はもつが、貨幣生成の共同行為に参加するという意識はもたない。

●無意識のうちでの本能的共同行為

従ってこの行為は無意識のうちになされる本能的共同行為である。

2）意識されない共同行為とは

●商品の本性

諸商品は単一の商品を一般的等価物とすることでお互いに価値として関係しあえる。

●商品所有者

自分の意志をこれらの物（商品）に宿す人格。

●共同行為の内実

人と人とが意志統一した上での共同行為ではなくて、人が物に意志を宿した結果として形成される共同行為。個々人が他人とは関係なく、商品に意志を宿すことで形成される社会関係。物象的依存関係にもとづいた人格的独立。

3）意志行為の前提としての判断

●思考と判断

意思が形成されるためには思考による判断がなされねばならない。

●判断の形式

分析によって抽象的な諸要素をとり出し、綜合によってそれらの諸要素を組み立てて判断を導く。

●概念的存在

物に意志を宿すことが可能になる条件は、その物が判断の形式をもつ概念的存在でなければならない。

4）商品の概念的存在

●抽象

諸商品は価値形態にあっては、この関係のなかでお互いに抽象しあっている。

●判断形式(1)

諸商品がお互いに価値として関係しあえる形態は、一つの商品を一般的等価物として除外すること。諸商品がそれぞれ直接交換可能性を要求しないこと。

●判断形式(2)

諸商品の価値の大きさは、等価商品の商品体で表示される。

●社会的象形文字としての商品

商品語の全思想は人間には理解不能だが価値の大きさだけは商品体の分量で示されるので理解できる。

5）物象の成立

●物に意志を宿す

物の身になって考える、ということではなく、「考え」て判断力をもつ物に意志を宿すこと。

●物象による意志支配

これは物の側から見れば、人格に対する意志支配であり、こうしてこの物は人格化して物象となる。

●支配・被支配関係とは意識されない

物象による意志支配は、人にあっては支配・被支配関係とは意識されない。自然法則に支配されているのと同じく、順応として捉えられる。物象の支配は社会的な自然法則への順応となる。

6）物象化と物神性

●判断形式(2)

価値が人の感覚に捉えられるものとしてあらわれるこの判断形式は、商品の価値の大きさを等価商品の商品体で示す。

●物象化

この場合等価商品の商品体は価値の化身として意義をもっているが、この形態は超感覚的である。この超感覚的な判断形式で意志支配がなされ、物象化がおきている。

●物神性

超感覚的な現象形態を結ぶかぎりでの等価商品の直接交換可能性という社会的力が、等価商品の自然にそなわる力として人の眼に映る。自然物に社会的力がそなわっているかのように見えることが起き、商品における物象化は物神性をともなう。

70年の総括と新しい社会運動の展望

― 21世紀の社会運動の網領獲得にむけて ―

榎原 均（『情況』1999年4月号）

第1章　革命戦争敗北の責任を引き受けて

あの時代の捉え方

1960年代末から70年代始めにかけての階級闘争をどのように総括するかと問うとき、当時の新左翼運動のなかでも二つの立場が生じてくる。一つは軍事組織を建設して革命戦争を闘った者の立場であり、もう一つはそれに影響されながらもそこまではふみ切らなかった者の立場である。後者の立場からの総括を意識しているのは、『カオスとロゴス』2号の朝日健太郎であるが、この立場は今回の私のテーマではない。

革命戦争を闘った者にとって、敗北した、という認識は共通である。しかし敗北をどう総括するかでまた二つの立場が分化してきた。一つは、革命戦争の方針を提起したことが間違っていたとし、それ以前の方針に立ち帰れという主張であり、もう一つは、革命戦争の方針は、そこに行きつく他はなかったとして肯定したうえで、敗北の要因をその方針のうちにさぐろうとする主張である。

当時は革命戦争の路線を堅持するか、それとも清算するか、という形で論争が行われたが、すぐ明らかになったことは、以前の方針（合法主義的大衆運動）に立ち帰れという立場に立てば、革命戦争の敗北についての責任を負えないことだった。方針が間違っていたと主張すれば、その方針の下に展開された運動に責任を負えなくなるのは当たり前のことである。

だから革命戦争の敗北に責任を負おうとすれば、革命戦争の路線を堅持する他はなかった。そして、革命戦争の条件が失われていけば、党活動を転換していけばよいのであった。

私たちは革命戦争の敗北に責任を負う、という立場から、革命戦争の路線を堅持しつつ敗北の総括に取り組んできた。そこで、ここではあの時代に革命戦争を闘った当事者として、どのように総括してきたかについて述べよう。従って、あの時代の個々の闘争の局面についての評価はしない。

共産主義者同盟（RG）の地平

これは後知恵だが、軍事組織を建設して革命戦争を闘えば、その主体は小さいといえども国家になる、ということだ。私たちも、連合赤軍も、当時はプロレタリアート組織のミニ国家になっていた。この事実について、明確に意識し得るようになったのは80年代に入ってからのことだが、この点についての明確な意識を欠いていた時期にも、非合法党として活動していた共産主義者同盟（RG）は、事実上、プロレタリアート独裁の

国家としての政治にとり組むことを強制されていた。

1983年に発行した『共産主義』18号でRG総括について特集して以降、『赤報』43号(85年)から、「社会革命と文化」と題する連載論文が始まったのも、この強制を受けとめようとしたものだったといえよう。そして自らをプロレタリアート独裁の国家の地平に置くことで、ソ連邦の解体の総括も、現実に解体が進行する以前に理論化することができたのだった。

私たちは革命戦争の路線を堅持することで自らをプロレタリアート独裁の国家の地平に置き、そうすることでプロレタリアート独裁の時期の共産主義的政治をどう展開するか、という課題に自らを直面させてきたのであった。レーニンや毛沢東の提起した文化革命論はこうして、私たちにとっては将来の問題ではなく、現下に遂行されるべき緊急の課題となった。今日プロレタリアート独裁の国家が存在しないにもかかわらず、その時期の政治である文化革命が展開できる、といった逆説じみた提起をしてきた背景にはこのような事情があった。

私たちはある時期から、レーニン主義の伝統的な党活動のスタイルに固執することをやめた。というのも、伝統的な党活動は政治権力の奪取という一点に向けて集中されたものだったからだ。レーニンが述べた「あらゆる事態に用意のある党」という党の概念を今日活かそうとすれば、プロレタリアート独裁期の共産主義的政治を構想し、実行することが当面の中心課題とならざるを得ないが、このような課題は伝統的な党活動の予定していないものだった。以下に述べる事柄は、伝統的な党活動とは切断された地点で活動を継続してきたなかで獲得されてきたものである。

第2章　総括の進展

左翼の意識性の狭さ

私たちの70年代革命戦争の総括は、『共産主義』18号で、そして総括にもとづく新しい方針は同誌21号で述べられている。ここではその内容と若干重複しながらも、主としてそれ以降明らかとなった総括及び方針の内容について明らかにしていこう。

色々なところで引用紹介しているが、まず88年12月にまとめられた文章「緊急の課題」から、テーゼ部分だけを再掲しておこう。

「(1)既成の党派(旧左翼・新左翼を問わず)の政治は、全て、最小限綱領のレベルの要求で大衆運動を組織することを土台にしていた。従って、左翼の意識性は、この土台に制約されているが、この意識性の狭さが80年代における左翼諸党派の運動の後退をつくりだした根本的要因である。

(2)今日、自然発生的な大衆運動の多くは、最大限綱領のレベルの要求で自己を組織している。それゆえ、最大限綱領のレベルの要求で大衆運動を組織することを土台にした新たな政治が問われている。そして、その新たな政治こそが、今日の活動家たちがもたねばならない意識性の内実なのである。

(3)最大限綱領のレベルの要求にもとづく大衆運動は、最小限綱領レベルの要求にもとづくそれとは、その運動の質、発展法則が異なっている。活動家たちは、最大限綱領のレベルの要求で大衆運動が自己を組織していることを認めるだけではなく、自分たちの意識性を確立するに当たって、この相違に注目しなければならない。」(『共産主義』21号、24～5頁 なお他に,『価値形態・物象化・物神性』あとがきにも全文の紹介がある。)

この文章が出来て間もなく、赤軍派の塩見孝也が、獄中18年の徳田球一の記録を破る長期拘禁を解かれて出獄してきた。東京と京都で出所祝いの会合がもたれ、私は京都の集まりではテーゼの趣旨を説明し東京の会合では発言の機会を与えられなかったので、文章を配布してまわった。

京都では「そんなことよりも、明日何をやるかが問題だ」とヤジを飛ばされ、東京での文章配布も反応はなかった。明日何をやるかがわからない、という悩みは、伝統的な党活動がゆきずまっていることの表明だが、私は「明日のことは分からないが十年後のことはよく分かる」と返したことを憶えている。そして現実に十年間が過ぎていった。テーゼに書かれた内容は、今では当たり前のことになっているのではなかろうか。

そして、当時ブント系活動家から反応が得られなかったのも、プロレタリアート独裁の国家の地平に立つか立たないか、という違いによると考えれば納得がいく。

無意識のうちでの本能的共同行為

さてテーゼ部分では述べられていないが、解説のなかで明らかにされているテーゼの基本思想は、商品・貨幣・資本の廃絶の実実践的展望であった。『価値形態・物象化・物神性』(入手方法は末尾に)で理論的に証明したことだが、手短かに言えば、商品から貨幣が生成されるのは、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為による、という、従来見逃されていた論点の発掘が決定的だった。マルクスの価値形態論の解読から導かれたこの論点からすれば、ソ連社会主義は、商品・貨幣を国家権力の意志行為でもって廃絶しようとしていたわけであるが、この試みは、無意識のうちに本能的に行われる行為を、意志でもって統制しようという背理をおかしていることが明らかとなる。

こうしてソ連社会主義(スターリン主義成立以前の)の総括を脱商品化論の誤りとして示し、迂回して人々の新しい社会関係を形成していく脱物象化の路線の正当性という見地から、レーニンの文化革命論の復権と、ネップを社会主義からの後退ではなく、社会主義への大道として位置づけなおすことが可能となった。そしてここまで総括が進めば、まず政治権力を奪取し、プロレタリアート独裁を樹立しなければ社会革命は始まらない、というマルクス・レーニン主義の階級闘争の原則についても再検討が可能となる。

永続革命論の総括

マルクスのプロレタリア革命論は永続革命論として提起されていた。それは、1850

年代にブルジョア革命に直面していたドイツで、ブルジョア革命が開始されれば、それをプロレタリア革命にまで永続させるという内容だった。さらに勝利したプロレタリア革命は、全世界（当時はヨーロッパ）のプロレタリア革命にまで革命を永続させる、という任務も加えられた。

レーニンは、まだブルジョア革命が完遂されていなかったロシアで、1917年に文字通りマルクスの永続革命論を実践した。ロシアには社会主義革命の条件はない、と主張したメンシェヴィキに対し、レーニンは革命が勃発した時点で「4月テーゼ」を発表し、従来の労農民主独裁論に代えて社会主義革命の旗印をかかげたのだった。以降永続革命論は主として一国革命から世界革命への革命の永続ということが主要な意味となった。

ところですでに見たように、政治権力を奪取しても、プロレタリアート独裁の政治によっては、商品・貨幣を廃絶することが出来ないことが判明すれば、政治権力を奪取することの意義が不透明となる。さらに、マルクスの永続革命論のもともとの論拠は、ブルジョア革命をプロレタリア革命にまで永続させる、という点にあったが、この意味での永続革命論は、今日ほとんどの国でブルジョア革命が終了していることで、その前提条件が欠けていることになる。

他方で、ロシアで社会主義革命が起き、後にスターリン主義へと変質していったとはいえ、プロレタリア革命の歴史的正当性は否定しえない。

私たちは60年代後半に、現代世界を過渡期世界と捉え、帝国主義諸国、第三世界、スターリン主義諸国の3ブロックに分れた世界の階級闘争を、世界革命戦争で統合し、世界革命にまで革命を永続させることを目指したが、この過渡期世界という現代世界の把握には、たとえスターリン主義に変質したとはいえ、ロシア革命が現代世界に与えた革命の波及力がまだ現存している、という認識に支えられていた。この過渡期世界論を再構成することが問われていたのである。

第３章　新たな路線の提起

危機論の再検討

過渡期世界論の再構成の第一のポイントは危機論の再検討から与えられた。従来の危機論は恐慌に革命の条件を求めるか、生産力と生産関係の矛盾論か、生産の社会性と取得の私的性格との矛盾かであった。しかし、『資本論』にはもう一つの危機論が述べられていた。これまで全然注目されてはこなかったが、労働の社会化と資本制的外被との間の矛盾がそれである。この危機論を反面解釈すれば、労働者階級が労働を社会化させることで革命のパワーを高めていっても、資本の側がその資本制的外被を社会化していけば、あたかもふくらんだ風船のように、危機を回避しうるという命題が導かれてくる。そして、ロシア革命と、1929年恐慌以降の世界資本主義の危機に直面して資本家階級がとった方策は、金本位制から管理通貨制への移行や、株式会

社の一般化にみられるように、まさに労働者階級のパワーを資本制的外被を社会化することで無化してきたのであった。

ロシア革命が起き、中国革命がこれに続き、さらにキューバ革命やベトナム革命が、進展していくことで、ブルジョアジーはますます資本制的外被を社会化することをせまられ続けてきた、これが再構成された過渡期世界論の骨格である。

資本制的外被の社会化は、レーニンの帝国主義論でおなじみの金融資本ですら社会化し解体していくほどの徹底性をもっている。そして、労働者階級をも文字通りの無産階級という存在から、労働三権を獲得し、議会に代表を送り、基幹産業の本工労働者は個人的にはブルジョアジーと事実上の同権者として社会化されることとなった。労働者階級が中流意識をもった市民へと成熟したのであった。

では階級は解消したか、といえば否である。生産手段に対する地位が異なる二大階級としてのブルジョアジーとプロレタリアート及び両階級がとり結ぶことによってしか成立し得ない資本家的生産様式の存在は現実のものである。この階級的視点を抜きに、現代の経済と社会を分析することは不可能である。にもかかわらず、今日アメリカでの最大の投資主体は家計であるといった点に見られるように、階級還元論によっては現代世界の現実は不可解のものとなる。

そこで提起されねばならないものが、日本やアメリカや西ヨーロッパ諸国は、プロレタリアート独裁の国家でもないのに、プロレタリアート独裁期の政治である文化革命が展開可能である、という逆説である。この立場から、過渡期世界論の再構成が可能となる。

文化革命の新たなイメージ

ここで問われてくるものは、文化革命のイメージである。レーニンがネップの時代に提起した文化革命は全住民に読み書きと計算の力をつけさせる、という控えめなものだった。毛沢東の文化大革命は、党内の走資派を打倒し、革命を世界革命にまで永続させる、という欲張ったもので、極めて政治的な内容をおびていた。では今日の過渡期世界で要求されている文化革命のイメージはどのようなものだろうか。

文化革命がプロレタリアート独裁期の政治として提起されるべきものである以上、それは何らかの意味で社会革命につながるものでなければならない。そこで社会革命について原理的に考察しよう。資本家的生産とそれにもとづく市場経済を変革しようとすれば、従来からも主張されてきた、政治権力を奪取して資本家階級の生産手段を収奪する、という方法の他に、もう一つ、資本家の下に働きに行かない、という「もう一つの働き方」をつくり出す方法があることがわかる。

スペインのバスク地方の生産協同組合、モンドラゴン協同組合群の指導者アリスメンディアリエタは、資本家企業に負けないだけの投資をするために団結することをモンドラゴン協同組合の労働者によびかけ、この団結を実現することで、モンドラゴン協同

組合群をスペイン有数の企業へと成長させたが、これは「もう一つの働き方」をつくり出すことが今日の過渡期世界では可能となっていることの実例である。

文化革命のイメージを「もう一つの働き方」を創出することにもとづく資本家的生産へのボディブローと捉えれば、この本来プロレタリアート独裁の下でしか発想できなかたものを、今日の過渡期世界で全般的に採用しうる闘争手段とすることができる。

政治の基準を文化におく

以上から、今日問われている課題は、プロレタリアートの独裁を樹立することを目標とすることではなくて、プロレタリアート独裁期の政治の内容たる文化革命を実施することであることが判明する。もちろん、現実には同じ文化革命と言っても、プロレタリアート独裁の下でのそれと、今日展開されるべきものとは異なっていよう。まず前者の場合、上からの文化革命となるが、後者の場合は下からの運動にならざるを得ない。

次に、まず政治権力を奪取するところからしか社会革命は始まらないとするマルクス主義の階級闘争の原則は、ブルジョア革命期には革命に先立って封建社会の胎内で新しい資本家的生産様式が生まれ発達していけたが、いったん成立したブルジョア社会にあっては、次の新しい生産様式を生み出すことは不可能だという認識によって裏づけられていた。ところがこの認識についてもあらためられるべきであり、今日では明確に、資本主義社会の胎内で、次世代の生産様式が生み出され、かつ発展していける、ということが主張されるべきある。

今日の文化革命は下からの運動となるが、その際運動は「もう一つの働き方」を実現することで、資本家的生産様式に代わる新しい生産様式をつくり出さざるを得ない。

そもそも文化なるものには必ずその土台に何らかの生産様式があった。同じ資本家的生産様式であっても、国が異なれば歴史的背景が異なり、そしてこの差異にもとづいて文化の多様性があった。そして、いま新しい文化を創出する文化革命を構想するとき、その土台には「もう一つの働き方」による新しい生産様式がなければ、その文化は維持もされず、従って波及力を持ち得ない。

そこで、文化革命の課題は結局、今日の資本家的生産が支配的な市場社会のうちにどのようにして新しい生産様式を形成していくか、ということに帰着することになる。そして課題をこのように提起することが、政治の基準を文化におく、ということの中身となる。

政治権力の奪取という問題は、このプロレタリアート独裁の未成立な社会での文化革命の進展と、そこでの新たな生産様式を基盤とした主体形成という迂回路をへて、現実的な課題として再浮上してくることになろう。

第４章　マルクス主義のバランスシート

亡んだもの

60年代末から70年代初頭の革命戦争の敗北の責任を引き受け、総括と新たな路

線の確立にむけての私たちの取り組みを述べたうえで、マルクスの思想の今日的継承として意義をもつ文化知のルーツについて明らかにしておこう。

その際まず、マルクスやマルクス主義の思想や理論のうち、何が亡び何が生き残っているかについて整理しておくことから始めよう。

亡んでしまったもの、あるいは歴史によって検証されたもののうち、とくに現時点で注目しておかねばならない論点は、恐慌革命論である。もちろん政治の世界は一寸先は闇であり、現代の恐慌が革命的危機をもたらす可能性を否定することは出来ない。とはいえ、一時期のマルクスのように、恐慌の到来に革命的危機を期待することは出来ない。

次に永続革命論がある。これにはブルジョア革命をプロレタリア革命にまで永続させる、という内容の他、一国でのプロレタリア革命を世界革命にまで永続させる、という内容もあるが、これらの革命論の前提に政治権力を奪取するところからしか社会革命は始まらない、という思想がある限りで、今日採用できない。

そして、政治権力を奪取するところからしか社会革命は始まらない、 という思想は、20世紀中ばまでは正当だったとしても、1970年代以降は急速にその影響力を失ってきた。今日問われていることは、この思想を否定するだけでなく、無意識のうちでの本能的共同行為による貨幣の生成という現実を見すえることから「もう一つの働き方」の実現によるもう一つの社会革命路線を対置することである。

改良と革命、平和革命か暴力革命か、これはマルクス主義陣営でたえず論争がなされてきたテーマであるが、もう一つの社会変革の路線が対置されれば、論争の土台そのものがとり代えられることになろう。新しい論点は政治的主体か経済的主体か、民主主義か協同か、といった次元におかれることになろう。

プロレタリアート独裁については、この課題は政治権力奪取後の課題ではなく、政治権力の獲得以前から、その政治が課題となっていると受けとめることで、ロシア革命の歴史的正当性とその遺産を引き継いだうえでの現代革命の路線として具体化されるべきである。

資本主義の全般的危機論や、体制間矛盾論の誤りについては、過渡期世界論の再構成で対応していけよう。

継承発展すべきもの

マルクスの思想や理論のうち、継承すべき最大の遺産は価値形態論である。とりわけ『資本論』初版本文の価値形態論は、科学知の限界を超え、人間の社会関係を合理的に解明していく文化知の実践となっている。従来『資本論』の研究者たちは、価値形態論についてほとんど何も理解し得ていなかったが、それは、マルクスが実践している文化知を、科学知の枠組みで理解しようとしていたからに他ならない。

価値形態論で示されているマルクスの文化知の実践を素材に文化知の方法を抽出

し、具体的な人間の社会関係を把握するすべを定式化すれば、この方法は言語や国家といった他の社会関係の把握をもたらすはずである。マルクス本人は、弁証法的方法と述べているが、この用語は手垢にまみれているので、あえて文化知の方法と規定しなおしている。価値形態論については『価値形態・物象化・物神性』でとりあげているので、ここではその内容に立ち入らない。

次に、資本主義の危機を労働の社会化と資本制的外被との間に求めた点が注目されるべきである。この危機論の反面解釈から、危機からの延命の方策として資本制的外被の社会化という論点が導き出されてくる。そしてこの論点は現代の資本主義を分析していく上で極めて強力な武器を提供してくれる。残念なことは、今日でも現状分析に情熱を燃やしている宇野派の人々の間でこの論点が全然無視されていることである。この論点さえしっかり把握されておれば、例えば正村公宏のように、「マルクスの間違い」について見当はずれの論拠を持ち出す必要はなかったろう。(正村公宏『経済学原理』、『経済学の学び方』)。

他に故福冨正実が強調した生産手段の共同占有論や、大工業と農業との相違をふまえた上での循環型農業の提起も見逃されてはならないし、また協同組合社会論や、過渡的存在としての株式会社把握も現代に活かすべき視点であろう。これらについては色々な機会に言及してきているので、ここでは21世紀の社会運動の網領の思想的土台となるべき文化知の創造について提起しておこう。

第5章　文化知の創造

第一節　文化知とは何か

【相対化される科学知】

文化を広い意味で生活様式と捉え、それに根ざした知の形態を文化知と呼ぼう。歴史上種々な知の形態があった。中世ヨーロッパにおいては宗教が知の形態の最高のものとされていたが、近世に入って科学知がそれに取って代わった。

しばらくは科学と技術は不可侵のものとされていたが、今日では科学知の位置はゆらいできている。とくに人生の生きがいを求めている若い人たちの間では科学知は求めるものを何も与えてくれない、ということで、宇宙意思とか、波動とかのオカルト知がさかえ、また宗教知も復活している。

【科学知の限界】

科学知が相対化された原因は、科学知そのものの内にあった。というのも、それは人間にとって身近なものとしてある社会関係についてほとんど何も理解しえていないからである。例えば労働の社会的関係の産物であり、それなしには生活できない商品や貨幣について、マルクスが解明しているにもかかわらず、定説がない。ましてや言葉とは何かとか、思考とは何かといったことになると何もわかっていないといってよい。

このように科学知は社会的存在としての人間を解明するという点では無力であった。

ではそれに代わるものとして登場してきているオカルトや信仰で問題が解決されるだろうか。幻想や信仰で人間の類的存在を知り、生きがいを探る、といった流行の試みに代わる知の形態が創りあげられねばならない。

【科学の方法の刷新】

文化知とは科学知の否定ではない。それは科学知の限界をこえて、社会的存在としての人間を解明し、類の実現形態を明らかにしていく。その際に文化知が順守するものはあくまで科学の方法である。とはいえ文化知を生み出すには科学の方法自体が刷新されねばならない。

文化知は科学知を相対化するが、それは科学の方法の刷新によってである。だから、文化知を、科学知を相対化した人間科学と特徴づけることができる。

つまり社会的存在としての人間、人間の社会的関係を解明するためには科学の方法の刷新が必要であり、この刷新が科学知を相対化する。

第2節　文化知創造の方法

【科学の方法への反省】

科学思想史をひもとけば、近代的な科学知の方法の創始者はデカルトとガリレオとされている。数学的物理学が世界の真理を説き明かすとみなす科学知の方法に対し、1930年代にはフッサールによって批判が試みられた。フッサールによれば、ガリレオは経験的な実験から理論をつくりあげるときに、数学的な規定を与えられた、理念性の世界をつくりあげたが、その際この世界のみが唯一の世界とされ、それが日常的な生活世界にすり替えられてしまうことによって、生活世界が隠蔽された、というのである。

このようなフッサールの観点は、デカルトと同時代人のヴィーコによって表明されていた。ヴィーコによれば人間がその存在の真理性を証明できるのは、それを人間が作っているからであり、人間が作ったものではない自然に関しては究極的な真理の証明は不可能で、絶えず探求がなされねばならないのであった。

マルクスも、ヴィーコの説を肯定的に捉えていたし、また、科学の方法によって得られた対象についての理論が、対象を科学的にわがものとする思考にとっての方法であり、それ自体は思考産物であって、対象とは区別されたものとみなしていた。

そして、マルクスは、価値形態の分析に際し、従来の科学の方法を刷新したが、しかし、その方法は分析内容と一体となっており、弁証法についての概略を書きたいという意思があったものの、方法論として提示されないままに終わった。

【現象学の限界】

従来の科学知は思考産物を対象についての真理とみなしていた。この方法に従えば対象はあくまでも客体にとどまっていた。ところが、人間の社会関係は主体相互の関係であり、主体－客体という図式を適用できない。

フッサールにはじまる現象学は、従来の

科学知の方法では捉え切れない領域を生活世界と規定し、そこにおける人間の間主体性を説きあかそうとしているが、しかし、人間の間主体性の現実的形態である商品や貨幣の分析をふまえないのでせいぜい心理学的知識を哲学体系のうちに取り込むことしかできていない。

そもそも哲学自体存在の論理と思考の論理の同一性という科学知と同じ前提の上に成立している。この前提があるからこそ、哲学は存在とは何か、ということについての思弁を展開できたのである。従って現代の哲学者たちも、その言葉に反して、実際には従来の科学の方法の枠にとどまり、科学知への根底的な批判には成功しなかったのである。

【価値形態論解読の意義】

現象学の提出した生活世界、それは今日の人間の社会生活ということだが、そこにあって最も身近な存在は商品や貨幣である。商品や貨幣が単なる物ではなく、人間の社会的関係であるが故に、それを分析しようとすれば、主体―客体図式は役に立たない。従来の科学の方法の刷新がせまられる。

商品、貨幣の秘密についてはマルクスが『資本論』の価値形態論でいったんは明らかにしたが、しかし、科学知全盛の時代ということもあり、マルクスの解法自体が謎とされてしまっている。そこでマルクスの価値形態論の解読を通して、刷新された科学の方法を定式化していくことが文化知創造の方法となる。

第3節　文化知の方法

【超感性的な現象形態】

文化知の対象はとりあえずは人間の社会的関係であるが、それは超感性的なものである。商品や貨幣にしても、個々の使用価値や通貨をとりあげても何もわからない。感性的につかみうる個物が相互に社会関係をとり結んでいるとき、この不可視の関係そのものを捉える方法ははたしてあるのだろうか。

関係そのものは感性では捉えられず、それは人間が思考産物として頭の中で組み立てることが出来るだけである。ところが関係の両極については人間の感性で捉えることができる。この両極としてあらわれている具体的なものを素材にして関係そのものの概念を思考産物として組み立てること、そのための方法が今問われている。

【関係としてしか存在しない実体の発見】

従来の関係の哲学にあっては、通常実体性が否定される。両極にある物自体の実体性は関係の中では否定されているので、この考え方に一面の真理はある。しかし、いま問われているものは、関係としてしか存在しない実体であり、社会的な実体を想定することである。

ソシュールがコトバは差異の体系だと述べたことに発し、商品の価値も差異の体系で、労働価値など存在しない、という説が流行している。関係が実体を否定すると考えている哲学者たちは、価値の実体性を否定することで、実は関係における同一性を否定している、ということに気付いていない。

ところが同一性のないところに関係はなく、関係がなければ差異もない。商品にしても、コトバにしても、国家にしても、それが人間の社会的関係である以上，同一性があり、それこそが関係としてしか存在しない実体なのである。マルクスの価値の実体とは、個物としての実体的なものではなく、社会的同一性の基体という意味での実体性なのである。

【形態規定】

関係としてしか存在しない実体が想定されることではじめて社会的関係における両極が、超感性的なものであるにもかかわらずどのような現象形態をとるかが判明する。

その時両極にあるものは、その本来の形態とは別にもう一つの形態をもつことになる。但し、その形態は超感性的である。

マルクスが形態規定と述べているのは、この社会的なものの二重の形態を捉える方法である。社会的なもの（物象）は本来の自然形態の他に社会関係によって形態規定されて新しい役割をもつ。

【思考の論理と存在の論理】

これまでの科学の方法は人間の思考の論理に従ったものだった。それは対象を分析することで抽象し、多くの規定へと還元したうえで今度はそれを思考のうちで総合し、多様なものの統一としての概念を得る。ガリレオ的科学至上主義の誤りはこの概念をそのまま対象についての真理とした点にある。

ところが人間の社会的関係にあっては、その関係の中で同一性と差異が確立される。ということはこの関係の中で人間の思考作用と同じ抽象と総合がなされていることになる。

その際注意すべきは、人間の思考が抽象するのは分析によってだが、関係にあっては総合によって抽象が行われることであり、ここに思考の論理とは区別された存在の論理を発見できる、ということである。

【類と個の転倒】

思考の論理でストレートに捉えられるのは、関係から切断された対象である。関係から切断された対象とは、それ自体自然物ではなく、人工物である。従って、それは道具とともに思考の延長となる。ヴィーコが言うように科学知が捉える真理はこの領域にある。

この領域では個物のみが実存し、それらを多様な統一として分析し、総合することで得られた概念のなかでは一般的で類的なものは抽象的規定となり、個物としての存在はありえない。

ところが関係を捉えようとする文化知の方法に従えば、抽象化は総合のうちに行われていることがわかり、関係にあっては抽象的で一般的で類的なものがその極にある個物の形態規定として現れることで、具体的な個物が、一般的で類的なものの実現形態とされることになる。この社会的関係における回り道と転倒の構造を捉えるところに弁証法の核心があり、文化知の方法の根本がある。

おわりに

文化知の創造についてテーゼ風に述

べてきたが、これはいずれ社会運動の綱領へと定式化されるべき課題である。この課題については少なくとも今世紀中に果たしていきたいと考えている。

なお、参考文献として入手可能な私たちの出版物の他、本誌に発表された論文の一覧をかかげておく。

【参考文献】

『価値形態・物象化・物神性』 榎原均著
発行者・資本論研究会　定価 2500 円
『共産主義』21 号
発行者・共産主義者同盟(RG) 定価 2500 円

左記文献入手希望者は、郵便振替 01090・5・67283 資本論研究会宛注文されたい。送料は当方負担。

「根源的他者と価値形態論」『情況』1991 年 9 月号
「価値形態・貨幣・社会主義」『情況』1991 年 12 月号
「文化としての国家の重み」『情況』1992 年 3 月号
「『ラジカリズムの復権』を批判する」『情況』1993 年 7 月号
「社会革命と無意識」『情況』1994 年 2 月号
「藤木進治―存在論的革命主義の脱構築」『情況』1994 年 3・4 月号

緊急の課題

（ 1988年12月 ）

【テーゼ】

(1) 既成の党派(旧左翼・新左翼を問わず)の政治は、全て、最小限綱領のレベルの要求で大衆運動を組織することを土台にしていた。従って左翼の意識性は、この土台に制約されているが、この意識性の狭さが 80 年代における左翼諸党派の運動の後退をつくりだした根本的要因である。

(2) 今日、自然発生的な大衆運動の多くは、最大限綱領のレベルの要求で自己を組織している。それゆえ、最大限綱領のレベルの要求で大衆運動を組織することを土台にした新たな政治が問われている。そして、この新たな政治こそが、今日の活動家たちがもたねばならない意識性の内実なのである。

(3) 最大限綱領のレベルの要求にもとづく大衆運動は、最小限綱領レベルの要求にもとづくそれとは、その運動の質、発展法則が異なっている。活動家たちは、最大限綱領のレベルの要求で大衆運動が自己を組織していることを認めるだけでなく、自分たちの意識性を確立するに当たって、この相違に注目しなければならない。

【解説】

(1) 最大限綱領は社会革命の綱領であり、政治的には階級の廃止であるが、商品・貨幣・資本関係の廃絶をその根本内容としている。他方、最小限綱領は、一般に当面の要求として理解されているが、その根本は民主主義である。従来の左翼の意識性は、民主主義的要求で組織した大衆運動を、ブルジョア国家権力の打倒へと導くことにおかれ、社会革命の諸要求で大衆運動を組織することはその視野に入ってはいなかった。そして革命運動の歴史的経験は、民主主義革命においてブルジョア階級を打破り、プロレタリアートの国家を樹立し、ブルジョア階級を収奪するところにまで進んだものの、商品・貨幣関係の廃絶については、その展望さえ明らかにすることができなかった。こうして死滅すべく組織されたはずのプロレタリアートの国家が変質して、官僚が階級に成長し、悪い意味での民主主義を社会の経済的関係にも徹底させ、民主主義の止揚に抵抗を試みることを許してしまうという苦い事態が生じている。

(2) この革命運動における困難を打破する唯一の道は、商品・貨幣関係の廃絶の実践的展望を明らかにすることから開かれよう。そして、この実践的展望の解明は、最大限綱領のレベルの要求での大衆運動を組織することを土台とした新たな政治運動を展開することを可能とするために、活動家に必要とされる意識性の要諦なのである。

(3) 商品・貨幣関係の廃絶の展望は、それらがどのようにして成立しているかを解くことから導かれてくる。そもそも貨幣は、諸商品に意志を宿した商品所有者たちが交換過程に直面して、本能的に単一の商品金で自分たちの商品の価値を表現するという共同行為を行うことによって生成され、そして、貨幣が生成されることによって商品関係は社会的に妥当なものとなり得たのであった。だから、所有者が自らの所有物に価格をつける、という行為が、貨幣関係を日々再生産しているのであり、このように所有者の行為によって日々再生産されているがゆえに、それを廃絶することも可能なのである。ところが、貨幣生成の共同行為は、なるほど商品所有者たちの意志行為ではあるものの、商品という物象に意志を支配された行為であり、社会的本能にもとづく行為であって、自由な人格間の自由な意志行為ではありえない。だから当事者たちにとって、この共同行為は無意識のうちになされているのであり、それゆえ彼らの意識にあっては、貨幣がすでに存在しているから自分たちの商品に価格をつけていると観念されていて、自分たちの共同行為が貨幣を生成させているという現実は意識されはしない。

(4) 物象による意志支配からどのように逃れるか、という問題は、今日では大衆がいだいている一般的な関心となっている。だからこの問題に対しては多くの思想家たちがとりくんできた。しかし、現代の思想家の誰もが問題そのものをきちんと把握していないのであって、その解法がデタラメなものにならざるをえなかったのも当然のなりゆきであった。問題を商品・貨幣関係の廃絶としてたてること、これが思想界の混乱から抜

け出るための出発点である。資本関係の方はどうするのか？という質問があるかもしれない。これについては、資本関係の廃絶は歴史上の経験があると答えるだけでよい。今日世界の資本関係がいまだ存続しているのは、その廃絶の実践的展望が明らかではないからではなくて、さらに進んで商品・貨幣関係の廃絶の実践的展望が不明なために、革命運動が自然成長的に得ている力を社会革命の力へと転じることができていない、ということによっているのだから。

(5) 物象による意志支配とは、根源的には貨幣生成のための本能的な共同行為に始まる。したがって、そこから逃れるためには、本能的な共同行為を廃絶すればよい。ところが、例え社会的なものであるとはいえ、本能的な行為を意識でもって統制しようとする試みは直接的には失敗せざるをえない。この共同行為は、法律的、あるいは行政的措置の手におえない領域にあるのであって、このことはプロレタリアートの独裁の下においても変わりはない。実際、プロレタリアートの独裁が、法律的、あるいは行政的働きかけでもって、商品・貨幣関係を廃絶しようとする試みが破産したということは、歴史上の現実なのである。

(6) この歴史上の現実はまた、ブルジョア社会が成熟しない時点での試みであり、従って、革命運動は、自らの試みを実現する物質的及び精神的諸条件をもち合わせていなかったこととして理解することができる。本能的な共同行為を直接に意識的に統制することが背理であるとしても、ブルジョア社会が成熟し、階級が成熟して、プロレタリアートの自然成長的な力量が増大しているもとで、大衆運動が最大限綱領のレベルの要求で自己を組織するようになってくると、この本能的共同行為を不必要とする物質的・精神的諸条件を形成することが実践的に可能となってくるのである。貨幣を生成する本能的な共同行為は、直接には統制できないが、しかしこの共同行為を不必要とする諸条件を形成さえすれば、迂回的に統制することができる。そして、これが、商品・貨幣関係の廃絶のための実践的展望の解明の手がかりなのである。

(7) 今日展開されている大衆運動は、自然発生的に商品・貨幣・資本関係の批判へと進んでいる。このことは、大衆運動が最大限綱領のレベルの要求で自己を組織していることの帰結である。しかしながら、この自然発生的な社会批判は商品・貨幣・資本関係を使用価値の側面で捉えて、これを批判する、ということにとどまっている。使用価値は千差万別であるので、使用価値批判にとどまる限り、大衆運動は課題別に分散化し、相互に対立しあうことになって、社会革命に不可欠な、運動の統合をもたらしえない。こうして大衆運動は、最大限綱領のレベルの要求をかかげていながらも、その自然発生的な展開においては、その要求を実現すべき運動の統合へと到ることが出来ないので、社会改良の道へと収れんされてしまうことになる。今日の大衆運動の多くは、資本に組織された社会と文明に対する使用価値批判（大規模工業批判や食品

添加物批判や公害批判等々）に留まっているので、資本の文明に対抗する社会改良の運動という側面が全面化し、その運動が最大限綱領のレベルの要求にもとづき、社会革命を展望している、という側面は隠されてしまうことになる。

(8) 今日の大衆運動にあって、活動家たちが運動を統合することを意図しながらも、現実には運動の分散化と相互間の対立が進行していること、このことは運動の自然発生性が優位であることの帰結である。もし、活動家たちが、使用価値批判からさらに進んで、商品・貨幣・資本関係を、この社会と文明を価値批判として批判するならば、それは、この社会と文明の統合原理を批判することを意味し、使用価値批判から出発した自然発生的な大衆運動を統合する思想的核心を獲得したことにはならないだろうか。

(9) 新社会の形成要素は、旧社会のうちですでに根を張っていなければならない。商品・貨幣関係の廃絶の展望が商品所有者たちの本能的共同行為を不必要とする諸条件を形成することによって与えられるとすれば、さしあたって問題となるのは，協同体である。ブルジョア社会においても、商品・貨幣・資本関係を排除した小協同体を形成することは可能である。しかし、この協同体の連合がそれ独自でブルジョア社会を転覆する普遍的な運動体に成長するという実践的展望は夢想にすぎない。貨幣生成の共同行為を不必要にする諸条件を経済的に形成する、というこの試みは、商品・貨幣・資本の価値批判にもとづく新たな文化形成のネットワークとして自己を位置づけたとき、意義あるものとなろう。ブルジョア社会における新社会の形成要素で、今日決定的に不足しているものは価値批判の文化である。この文化こそが、貨幣生成の共同行為を不必要にする諸条件のうちのブルジョア社会に根を張ることの可能な主要なものである。今日の大衆運動の戦線が、商品・貨幣・資本関係の廃絶の実践的展望としてある文化の形成を自己の課題とするとき、社会革命をめざした運動の統合は現実のものとなるであろう。

Ⅳ）脱商品化と脱物象化
産消提携運動の運動論を求めて

A）商品・貨幣（お金）はどのようにして生み出されるか

1）人々の経済の領域での社会的行為による
今日の社会では財の所有は私有制である。この社会では生産者は自分の生産物について独特の社会的行為を行わなければ生活できない。

2）生産物に価格をつける
生産者が生産物の価格をつけるとき、それを売ってお金にし、そのお金で社会的な財として有る他人の生産物を買うためだ。ところがこの生産者たちの行為には彼らが意図しない行為が含まれている。

3）自分の生産物では何も買えない
もしそれぞれの生産者が自分のつくった野菜や果物で、社会から自動車やテレビを買おうとしても買えない。この場合、野菜や果物は社会に通用する形式をとれなかった。

4）価格をつけることの裏にある行為
価格をつける、ということは生産者たちが自分の生産物で買おうとする代わりにそれを商品金に対して売りに出すことだ。このとき、個々の生産者たちは意識してはいないが、全ての生産者が商品金に対して自分たちの生産物を売り出す、という共同行為をしていることになる。

5）無意識のうちでの本能的共同行為
この共同行為の結果、商品金は他の全ての商品を買えることになる。だから生産者が価格をつける、という行為の裏には商品金を貨幣にするという無意識のうちでの本能的共同行為がある。生産者たちは意識せずに貨幣を生み出す共同行為に参加することで自分たちの生産物が社会ではいくらの価値あるものとして通用するかを示せたのだ。

B）商品とは何か

1）私有物の社会性
財の私有制の社会で私有物を私有のままで社会に通用させるシステム。

2）社会性のメカニズム
人々は自らの私的諸労働の生産物に価格をつけるとき、意識せずに単一の私的労働の生産物（商品金）に自分たちの生産物を共同で関連させている。そうなると、この単一の商品金は私有物のままで、万人が要求する社会的なものに転化する。そこでこの当初の関連が人々の私的労働の生産物の社会的形態になれる。

3）市場の調整作用の神話
商品経済から成る市場社会では、人々は自分の経済的利益だけを追求しておれば、市場の調整作用で社会の資源配分がうまくいくと考えられていた。しかし、今日ではこれは神話でしかない。

C.）商品はなくせるか

1）商品はなくすことが可能
商品と貨幣は生産者たちの日常の取引でたえず生み出し続けられているから、恒常的に存在し得ている。生産者たちが自分たちの生産物を売りに出さなければ、商品も貨幣もなくなる。商品はなくせないものではない。

2）無意識的行為を意志で統制できるか
商品や貨幣が、人々の無意識のうちでの本能的共同行為で日々生み出されているとすれば、そのような存在を法律や命令ではなくせない。ソ連邦解体の基本的要因がここにある。

3）脱商品化から脱物象化へ
商品をなくす脱商品化は小さな領域では可能。やや広い領域では、商品は私有制下の人々の経済の社会性を代表しているから、商品に代わる人々の経済の社会性がもう一つの経済として形成されない限りなくせない。ここでは商品やお金がもっている価値観に支配されないようなコミュニケーションをともなった、生産、流通、消費のシステムは成立可能（脱物象化）。
脱商品化のシステムと、脱物象化のシステムがお互いに認め合うことで、もう一つの経済システムがより豊かな文化を社会に発信することができる。（1997年12月）

「科学知から文化知へ」
（第２回　言語とは何か）

1999. 10. 3　　榎原　均

はじめに

言語をどう捉えるかには色々な切り口がある。言語学の標準テキスト（『言語学』東大出版会）の目次は次のようになっている。

言語学とは何か、語の構造、文の構造、語の意味、文の意味、言語の類型、言語の変化、音の構造

このテキストには言語とは何か、という問いはない。他方、吉本隆明は『言語にとって美とは何か』という著書で有名だが、彼の言語観は表現論である。

「（言語学者は言語というものがなにか、言語としてあると捉える）しかし僕の考えでは、言語というようなものはないのです。つまり表現されなければそれはない。だから表現としての言語ということが問題になってくるわけです。そこでは表現過程というようなものが問題になる。」（『共同幻想論』）

また言語を人間の生理作用と捉え、神経生理学的見地から捉える言語心理学もある。

文化知から言語を見ることを明らかにしていくために、言語の定義をみよう。サピアによれば「言語とは任意に造られた記号の体系によって、観念、情緒、または欲望を伝達するための、純粋に人間的で、非本能的な方法である」（『言語』６頁）とされ、また『ラルース言語学用語辞典』では「最も日常的な意味では、＜言語＞は伝達の道具であり、同一共同体の成員に特有の、声による記号の体系にある」とされている。

言語を伝達のための道具や方法と見る見方の裏には「言語名称目録観」がひそんでいる。というのも、この考え方は、言語以前から存在そのものによってカテゴリー化されている事物や、言語以前に存在している存在の概念（イデア）を指し示す道具として言語を捉えているからである。

文化知から言語を見るとは、この言語についての日常意識と、それを体系化している言語学とを批判することである。この批判はソシュールによって始められ、日本では丸山圭三郎がひきつぎ、「言語名称目録観」批判を言語のフェティシズム論として展開した。今回のテーマはソシュールの言語学批判を受けつぎ、その限界を明らかにし、さらに丸山説の批判のうえに、新たな言語フェティシズム論を展開することである。

Ⅰ）言語で表示される意識

１）「商品で表示される労働」を手がかりに

(1) 対象化された労働

労働生産物を対象化された労働と見、それを労働時間へと抽象し、商品の交換価値の尺度とみたのがリカードの古典経済学。対象化された労働という考え方は、経済学の土台にある。

ちなみに哲学者は労働というと生きた労働を想定してしまい、『資本論』解釈をいつも変な方向にもっていってしまう。

(2) 対象化された労働論の限界

これは個人の労働であれ、集団的な労働であれ、生産過程での労働が生産物に対象化される、とい

う理解の枠内にある。

(3)「商品で表示される労働の二重性」

マルクスも中期マルクス（『経済学批判要綱』）までは対象化された労働論だったが、『資本論』では「商品で表示された労働」へと変え、ここに「批判的把握の全秘密」があるとした。こうすることで価値の実体としての抽象的人間労働が、商品の価値形態において抽象しあう社会的労働であることを示すことが可能となった。

2）対象化された意識（思考）

(1) 意識と言語

意識はコトバにすることで対象化される。個人の意識がコトバという社会的なものとなる。だから言語自体意識の形態である。

(2) 社会的意識諸形態

マルクスは意識に定義を与えていない。しかし社会的意識諸形態として、哲学、宗教、道徳、政治、法などをあげている。そして、意識を形態として捉える、ということはそれを対象化されたものとみなすことになる。

(3) ヘーゲル『哲学入門』（岩波書店）

・意識とは

意識一般とは、自己の或る対象一内的であれ、外的であれ、一への関係である。」（14頁）

・思惟（思考）とは

「思惟は一般に多様の統一的な把握であり、総合である。多様そのものは一般に外面性に、すなわち感情と感性的直観に属す。」（153頁）

・抽象とは

「知性が具体的ないろいろの直観から、多様の規定の或るものを除去し、他の或るものを取りあげ、そしてこれに思惟の単純な形式を与える場合、思惟は抽象である。」（154頁）

・反照（反省）規定とは？

「本質は自分自身の中に反照し、自分を規定する。しかし本質の諸規定は統一のなかにある。諸規定は単に定立された有である。すなわち、それらは直接的に向自にあるものではなくて、どこまでも統一の中にあるものである。それ故に諸規定は関係である。それは反省規定である。」（171頁）

3）言語で表示される意識

(1) ソシュールのシニフィアンとシニフィエ

言語記号は物と名称とを結合させるのではなく、概念（シンフィエ）と音響心象（シニフィアン）との結合である。

(2) 意識の社会性

意識それ自体社会的なものだが、しかし個人の意識活動ぬきには意識自体存在しえない。対象化された意識というと、個人の意識が対象化されていく過程は捉えられるが、ヘーゲルが言うように、意識一般が自己の自己あるいは対象との関係であるとすれば、言語こそが意識が二重性をもつものとして表示される形態である。シニフィアン（音響心象）は個的であり、他方シニフィエ（概念）は社会的、間主体的なものである。

(3) マルクス

「貨幣を言語と比較することもこれに劣らず誤っている。理念は独自性が解消して、社会的性格が理念とならんで言語のうちに存在している一あたかも価格が商品とならんで存在しているように一というようには言語に転化されない。理念は言語からはなれては存在しない。」（『経済学批判要綱』原典81頁）

Ⅱ）文化知の方法と言語

1）超感性的な現象形態

言語記号の二重性。「イヌ」という発語のうちに音響心象（シニフィアン）とイヌの概念（シニフィエ）との結合を見る。ソシュールの発見。

2）関係としてしか存在しない実体

「イヌ」という言語と、それが指示している現身のイヌとの関係において共通なものは対象化された意識である。ソシュールは気付かなかった。

3）形態規定

「イヌ」という発語によって指示された現身イヌは、発語によって言語と関係づけられ、この関係のなかで形態規定され、対象化された意識の化身とされる。

4）回り道の構造

現身のイヌを人間が造り出したイヌの概念の化身とする、という回り道をへて、人間はイヌの概念を社会化、共同化する。

5）思考の論理と存在の論理

言語による対象への形態規定が思考の論理を生成させる。言語と対象との関係は形態規定であり、関係のうちで抽象しあう総合による抽象であるのに、この言語の存在様式そのものが分析による抽象という思考の論理を生み出す。

6）類と個の転倒

存在としの言語、言語関係にあっては、具体的な個物、現身のイヌが一般的で類的なものの実現形態とされる。現身のイヌがイヌの概念をもつものとされ、言語名称目録観が成立する。

Ⅲ）科学知とは何か

1）物理学を原型とした科学知

・対象の数量化

自然科学だけでなく、人文、社会科学でも数量化の努力はなされている。

論理実証主義、認知心理学、音韻論、計量言語学など。

・実験と測定

対象を数量化することによって、実験を行い観測し測定することで対象の法則を明らかにする。

社会科学では、交通事故の被害者や精神障害者が実験の材料とされている。

・法則と真理

対象の法則が唯一真理とされる。これは没価値的で普遍妥当な真理とみなされ、対象の意味を問うことは、科学知の領域からはしめ出される。

2）相対化される科学知

・若い人達の意識

科学知も宗教知もオカルト知も等価とみている。

・科学知の限界

人間にとって身近なものである商品・貨幣や言語や国家などの社会的関係について解明できていない。

・科学知の自己批判

フッサールのガリレオ批判。レヴィ＝ストロースの野生の思考、西洋第一主義の否定。ハンセンの「観察の理論負荷性」。クーンのパラダイム論、ヴィーコの復権（佐々木力）「科学で言える真理とは人間が作ったものに関する知識に言えることで、自然に対しては言えることではない」

・文化知の必要性

科学知の自己批判はどれもたよりない。現象学は生活世界を提起したが、これを解明する方法（経済学批判＝文化知）をもちえていない。

Ⅳ）文化知から見た言語（言語文化論）

言語名称目録観がいかにして成立するかを解きあかすこと。（別紙参照）

Ⅴ）言語のフェティシズム

1）丸山圭三郎の説

・文化のフェティシズム

「一方にまず本物を立てておいて、片方にその偽物をおく、そして偽物の方が本物に代わって幅をきかすようになる、という現象のこと、……人間文化すべてに共通するフェティシズムではあるまいか」（『文化のフェティシズム』109頁）

2）丸山説の批判

・言語のフェティシズムとは

言語記号は指向対象を対象化された意識の化身としているのだから、それは指向対象を物化するのではなく、指向対象に意識を概念化する力を与えていることになる。ニセモノでもホンモノに見せる、といったことが物化やフェティシズムではなく、指向対象に概念の生成力を与えることがフェティシズムなのだ。

3）科学の成立根拠

・科学知の対象観

対象そのもののうちに概念があるとし、対象の概念に合わせて思考が合理的に概念を組みたてることで、真理を獲得する、という科学知は、実は言語のフェティシズムによって成立している言語名称目録観のなかでしか存在しえないものである。

・科学知の真理論

科学知の真理論は対象と認識との一致であるが、この観念は、言語を使うことで指向対象を概念の化身とし、そのことで指向対象に概念があるように思わされてしまうという言語フェティシズムの産物である。科学知が唱える真理とは人間が造ったもので、これはたえず造りなおしてゆかねばならない理論仮説に他ならない。

4）文化知による科学知の相対化

言語のフェティシズムの内部で成立している思考の論理とその合理的表現としてある科学知に、その成立根拠を示すことで、その限界を知らしめること。

文化知とは人々の生活感覚の理論化であり、集団によって形成される理性であり、集団的実践によって豊富化される実践知である。新しい社会運動は文化知創造の主体としての自己を知ることで、次の段階を切り拓くことができよう。

C）文化知から見た言語

1）ソシュールの継承

●言語名称目録の批判

事物 ｛※――a ※――b ※――c｝ 名称

上図ではなく　a－b－cの体系が問題

●単位の追求

言語記号そのものに内在する単位としての価値の追求。記号の内的関係を考察の対象とした。思考一音。

●差異の体系

言語の現象形態からみると、この同一性の関係が差異の体系となる。

2）ソシュールの限界

●同一性の質

ソシュールが言語記号そのものに内在する同一性、価値、単位の質を明らかにできなかった。

●言語名称目録批判

その結果、他国語のもつ意義のズレから言語名称目録の批判を行った。

3）言語の基本形態は語

●言語記号の二重性

音と意義

音は音素にまで分割されるが、音素の研究は、言語文化論には属さない。

意義の方は指示対象に原因があるかのように見える。言語記号に内在的な意義はあるが、これが言語文化論の課題。

●語の同一性

同じ語をくりかえす、という意味ではない。

語の交換可能性、ということでもない。語と語の間には一般的な交換可能性はない。

語は意義をもつ、という点で共通。

4）言語記号の形態（関係）論

●超感性的な形態

ここでとりあげる形態は超感性的である。

●同一性

言語の同一性は、記号同士の関係にあるのではなく、記号が指示対象と関係することにおいて現れてくる。

5）同一性の形態

●簡単な形態

「イヌ」という発話はイヌがいるという意味としては、次の形態をとる。

イヌ ＝

文化知からすれば、この同等性関係において、言語記号イヌは自分に等しいものとしての、つまり対象化された意識としての「イヌ」に関係している。ここでは指示対象としての生身のイヌは対象化された意識の化身とされている。

言葉は指示対象を指すことによって、その指示対象を対象化された意識の化身とすることがわかれば、客体を意識のなかにとり込む力が言語そのものにあることになる。

●展開された形態

イヌ ＝

≠

≠

簡単な形態は実は他の全ての否定の関係をともなっていた。

生身のイヌが対象化された意識の化身とされることで音イヌが意義をもつが、これは他の全てのものとの否定の関係を形成することを通してである。

●言語のシステム（差異の体系）

イヌ ＝

≠ …

≠ …

ネコ ＝

≠ …

≠ …

ウシ ＝

≠ …

≠ …

音イヌが特定の意義をもつ関係はまた、この言語記号の一般的な形態ではじめて確定的なものとなる。

言語記号の同一性の関係は、ここでは記号どうしの差異として表示される。この関係を転倒すれば、言語名称目録が得られる。

●言語名称目録

＝ イヌ

＝ ネコ

＝ ウシ

言語記号が指示対象との同一性を指示対象を対象化された意識の化身とすることで表現することによって、この対象化された意識（言葉）を生身の指示対象の生まれながらの属性として人の眼に反映させる。言語のフェティシズムの成立。

アソシエ21関西事務局より
本日参加された皆様へ

アソシエ２１関西事務局（第一回６／２３）、世話人会（発起会７／２３）をよびかけ、起動しはじめて、早いもので５ヵ月近くが経ちます。多くの方々の理解と協力のもとに、ご案内のように、５回のプレ講座も盛況のうちに無事終了し、多くの新しい人たち、特に若い人たちとの出会いがありました。その人たちと共に、本日の関西講演集会の準備をすすめてきました。前日には、東京を中心に地方のアソシエ２１会員の皆さんとの交流交歓の場を設定しました。実際に膝を交えて、場を共有するところから、「批判的知性の協働」ははじまるのではないか、という素朴な想いと、アソシエ２１のよびかけ、賛同人の面々の質量のすごさに心動かされた私（たち）としては、これが機能しないようでは駄目ですね、という了解があるような気がしています。それが「なんとしてでもものにしよう」という気持ちをかきたてるのだ、と思います。

なんとなく、うまくのせられてしまった私（たち）のようでもありますが、こうして執拗に会員や知人、そして未知なる「批判的知性」へ、想いを発信しつづけようと思います。

３５０名の会場をどのような面々のどのような邂逅の時空に創造できるのか、そのようなことを考え、一人一人の創意を集中してきたつもりです。事務局／世話人会の役割、責任は、アソシエ２１関西の活動が機能するように企画調整実行していくことだと思います。私（たち）はすすんでそれを引き受けるつもりですが、アソシエ２１関西、事務局／世話人会のすべては開かれた組織であるとも確信しています。すべての会員、友人、ならびに本日参集されたすべてのみなさんに参加、協働、関心をもとめます。

※アソシエ２１関西のこれから

アソシエ２１関西では、プレ講座、関西講演集会以降も、様々な講座、イベントなど創造的横断的な活動を展開していくことになります。会員、非会員問わず多くの方のご意見、ご要望にできるだけ添えるように考えていますので、関西事務局宛にどしどしお申しつけ下さるようお願いいたします。

○プレ講座、関西講演集会の内容を継承する第１期関西講座（月１回、年12回）を募集開講します。

○他にも、

＊次世代の社会システムを構想しよう...
＊有機農業はどうなっているのか？
＊全共闘って何だったの...
＊フェミニズムでない女性解放論を...
＊環境ホルモンはどうやって対処していけばいいのか...
＊遺伝子組換食品はどこが良くないのか...
＊スターリン（主義）とは何なのか考えたい....
＊反戦の前に軍事論をまず押さえておこう...
＊いや、やっぱりマルクス・エンゲルスでしょう...
＊リサイクル社会は構想できるのか...
＊環境問題とは何なのか...
＊原発のない世界は実現できるのか？
＊生きた語学講座をやりたい...
＊プロパガンダ映画を見るってのはどう？

と、好き勝手に案が飛んでいます。

21世紀の社会運動の展望

1999. 11. 21 榎原　均

第1部　科学知から文化知へ

1)　プレ講座第１回　貨幣とは何か。

＊　文化知の方法を求めて

マルクスが『資本論』で価値形態を解読するときに用いた方法を抽出。初版本文 価値形態論の簡単な価値形態の解読に全てが含まれている。 相対的価値形態にある商品Ａは,自分に等しいものとしての他の1つの商品Ｂに関係している。

＊　文化知の方法

(1)　**人間の社会関係とは超感性的な現象形態である。**

関係 Ａ＝Ｂには、両極がある。しかし、両極の感性的なものである使用価値 ＡとＢは、この関係の中で超感性的な現象形態の担い手となっている。

(2)　**関係としてしか存在しない実体の発見**

異なるもの A, B の関係、 A＝B における同一性は超感性的な社会的実体(抽象的人間的労働)である。

(3)　**形態規定**

両極が超感性的な現象形態としてあらわれて二重物となる。 Ｂは社会的に形態規定されて、その自然的質とは別の社会的(超感性的)な内容を表現する。

(4)　**回り道の構造**

自然発生的な社会関係にあっては、社会性は、回り道をして表示される。

(5)　**思考の論理と存在の論理**

思考の場合、分析による抽象化で、対象を多様な規定に還元する。これを上向的に総合し、思考のうちに多様な規定の統一としての概念を得る。 存在にあっては、関係(総合)のうちで抽象がなされている。 判断は自然物を形態規定し、記号とすることで提示される。

(6)　**類と個の転倒**

思考にあっては個物のみが実在し、種や類概念に当たるものは個物として存在しない。存在する関係にあっては、具体的な個物が一般的で類的なものの実現形態とされる。 これが、自然物が生まれながらに社会的属性をもつように見える根本的要因。

＊　価値形態論の新しい読み

無意識のうちでの本能的共同行為による貨幣の生成。　政治権力の奪取からしか社会革命は始まらないという マルクス・レーニン主義の伝統的な革命論の批判と克服が、可

能になる。(脱物象化の運動論は第２部で提起する。)

2) プレ講座第２回　言語とは何か

＊　言語をどう捉えるか

言語名称目録観が人間の頭の中に必然的に形成されることを示して、言語のフェティシズムを批判する。ここでは、言葉による命名を問題とする。

＊　言語名称目録観

発語以前から存在そのものによってカテゴリー化されている事物や概念があり、それを指し示すものが言語だとみる常識的な考え方。 ソシュールはこれを批判し、言語を差異の体系と捉えた。

＊　文化知の方法による言語の解読

(1)　**超感性的な現象形態**

言語記号の二重性。「イヌ」という発語のうちに、音響心象(シニフィアン)とイヌの概念(シニフィエ)との結合を見る。 ソシュールの発見。

(2)　**関係としてしか存在しない実体**

言語を対象化された意識の形態として見ると、言語記号と指示対象との関係を超感性的な現象形態と捉え、この関係で共通なものは対象化された意識であることが判明する。 ソシュールは気づかなかった。

(3)　**形態現象**

「イヌ」という発語によって指示された現身のイヌは、発語によって、言語記号と関係づけられ、この関係のうちで形態規定され、対象化された意識の化身とされる。

(4)　**回り道の構造**

現身のイヌを人間が創ったイヌの概念の化身とするという回り道で、人間は、イヌの概念を社会化、共同化する。

(5)　**思考の論理と存在の論理**

言語による対象への形態規定が、思考の論理を生成させる。言語と対象との関係は、形態規定であり、関係のうちで抽象しあう総合による抽象なのに、この言語の存在様式が、分析による抽象という思考の論理を生み出す。

(6)　**類と個の転倒**

存在としての言語、言語関係にあっては、具体的な個物、現身のイヌが、一般的で類的なものの実現形態とされる。現身のイヌが、それ自身でイヌの概念をもつものとされ、言語名称目録観が成立する。

＊　科学知の限界とその成立根拠

人間にとって身近なもの、商品、貨幣、資本や言語や国家などの社会関係について、解明できていない。 対象そのものに概念があるとし、対象の概念に合わせて思考が合理的に概念を組み立てることで真理を獲得するという科学知は、 実は、言語のフェティシズムによって成立している言語名称目録観のなかでしか存在しないもの。これが科学

知の限界を規定している。

3) 科学知への批判について

＊ 科学知の限界についての認識は進んでいる。

フッサールのガリレオ批判。レヴィストロースの野生の思考、西洋第一主義の否定。ハンセンの「観察の理論負荷性」。クーンのパラダイム論。佐々木力のヴィーコの復権など。

デカルトと同時代人のヴィーコは、「科学でいえる真理とは、人間が作ったものに関する知識に言えることで、自然に対して言えることではない。」と述べた。

＊ 文化知はどうするか。

科学批判を自己目的化しない。 科学が解明できなかった人間の社会関係を、解き明かすことで、科学の限界を示す。 文化知から言語を見ることで、科学知が言語の作り出す幻想(フェティシズム)の内で成立していること(言語名称目録観が科学の前提となっている)が明らかにされた。

とはいっても、この言語のフェティシズムは、人間が観念のなかで勝手につくり出した幻想ではなく、自然を人間的自然へと変革していく武器として、大いに役立ったのである。だが、いま問題となっているのは、科学と技術を武器にして作り出してきた人間的自然の、自然との適合性であり、これについては、ヴィーコが洞察していたように科学では解決できないのである。

4) 文化知からみた市民社会と国家

(1) 「 国家＝階級支配の道具 」論批判の二潮流

(イ) 「 国家＝共同幻想 」論

＊ その内容

市民社会の原理を自由・平等 と見、そしてその現実は、エゴの衝突とみる。ここからバラバラな市民社会を統合すべき統合イデオロギー ＝ 共同幻想による統治の不可避性を説く。

＊ この批判

自由・平等はブルジョア国家の原理であって、市民社会の原理ではない。自由 ・平等とは市場における経済的な契約関係の法的・政治的表現である。 市民社会は宗教的構造をもっている(商品の貨幣・資本の物象性)。 経済的な支配・服従の関係(階級関係)もある。 さらに物象による意志支配にもとづく社会的統合力をももつ。

＊ 共同幻想は何故生まれるか

社会的統合力が、物象を媒介にした物象的依存関係だから、人間の意識にあっては、資本や貨幣といった自然物の社会的な力にみえ、政治(国家)による社会的統合の必要性という社会的意識が生まれる。 これが、過去の国家意識を同化して、共同幻想、あるいは、一般意志が形成される。

＊ 国家の必然性

市民社会における社会的統合が、貨幣を媒介にして私的諸労働を社会的労働に転化するシステムによっていることが、国家を必然的に要請する。 私人が直接社会性をもたない市民社会にあっては、私人を公人とするための回り道を必要とする。 人々は国家を媒介としてはじめて相互に国民として関係できる。市民社会での人々の契約の関係の政治的表現である自由・平等という抽象的な原理の化身として国家がある。

(ロ) 「 国家 ＝ 第三権力 」論

＊ その内容

支配階級と被支配階級の双方から独立し、 その上に立つ第三の権力が、国家の本質(滝村説)。特殊利害と共通利害との分裂が、第三権力を生む歴史的な根拠。 国家意志は幻想上の国家的共通利害である。

＊ 滝村の市民社会論

滝村が、経済的関係のうちに意志関係、意志支配を論じているのはよいが、それが物象を媒介とした支配であることが解明しえていない。

＊ 滝村の国家論

滝村理論の内容は、市民社会における資本の権力に対する労働者階級の階級闘争が第三権力として、資本家階級の特殊利害からは独立した国家意志にもとづく国家の介入を受けることによって、資本の体制が維持されるという構造をもった階級独裁だ、ということ。

＊ 特殊利害と共通利害

これは対立するものではなく、双方の間には同一性がある。同一性に注目すると、共通利害は諸特殊利害を抽象した一般的なものだ、ということになる。

問題は一般的・抽象的なものである国家意志が、個的実体的なものとして現れ、それが特殊的、個別的な利害を支配するのはなぜか、ということである。個と類の転倒がここでも見られるが、これは、国家の本質をなす。

(2) 文化知から見た国家

(イ) 市民社会と国家

＊ 市民社会の社会性

私的所有者が本能的共同行為によって社会的労働の化身(貨幣)を生成し、この貨幣(物象)との関係によって自己の労働を社会化する、というシステムが、市民社会における人々の社会性である。

この社会性は政治的には物象的依存関係に裏づけられた人格の独立となる。 政治的に独立した私的所有者たちは、一般意志の化身としての民主国家の樹立へと進む。

＊ ブルジョア革命とブルジョア国家の形成

経済的な力をたくわえたブルジョア階級は、被抑圧階級をまとめて封建勢力を打倒し、ブルジョア的一般意志にもとづく民主国家を樹立した。

＊ 国家論の課題

a、国家起源論　b、国家タイプ論　c、民主主義国家論（市民社会と国家、土台と上部構造、国家機関説、多元的国家論、など）

＊　文化知では関係を見る。

a、政治とは、説得によるか権力によるかを問わず、他人の意志の領有である。

b、民主主義とは、意思決定のシステムで、個人の独立を前提とし、市場経済を土台としている。

c、権力とは、力関係である。この力関係の現象形態は、超感性的であり、従って、権力は、権力者に属するかのように見える。

d、協同とは、政治と民主主義の止揚であり、アソシアシオンを土台とする。

＊　市民社会論の課題

市民社会論とは上部構造論でなければならない。商品市場では、物象的依存関係を裏にもつ人格的独立があらわれ、資本・賃労働関係では、経済的な服従を裏にもつ二重の意味での自由があらわれる。

ソシュールが、言語記号をシニフィアンとシニフィエの二重物と捉えたように、市民社会の人間は、政治的自由と経済的服従もしくは物象的依存との、二重物なのである。この二重物が超感性的な現象形態として展開されると、力関係の表現となり、そして、この政治的力関係は、法（基本的人権）を生成する。

(3)　人権宣言 ＝ 民主主義国家の成立について

＊　民主主義国家における権力関係

A ←→ B

個人Aが個人Bとの間に権力関係を発生させるとき、例えば、Bの財産を盗めば、Bは直接権力をAに向けるのではなく、Bは法の化身としてあらわれ、司法権を作動させて、Aを裁こうとする。

＊　権力関係の現象形態

a、簡単な形態

A ←→ B

b、複数の関係、あるいは、前近代的階級支配

A ←→ B
　←→ C
　←→ D

c、一般的な関係、あるいは、近代的階級支配

B ←→ A
C ←→
D ←→

＊　人権宣言形成の論理構造

土地所有にもとづく封建的国家にあっての領主と直接的生産者との力関係の現象形態は、形態 b である。ここでは直接的生産者の抵抗は個別的であり、一般的な法的形

態をとれない。

前近代社会の力関係が、直接生産者自身の変化、つまり、資本・賃労働関係の成立により、打破られたとき、形態 c が成立する。社会の支配階級は、人権宣言を発し、それとの関係で、B, C, Dが同等な権力関係のうちに含まれていることを確認する。社会を法治社会へ向けて動かす動因は、形態 c にあり、この動きに逆らった旧支配層は打倒された。

(4)　文化知から見た権力の現象形態

＊　市民社会の二重性

労働者の政治的自由と経済的服従，あるいは市民の政治的自由と物象的依存、A←→Bを、個人Aと個人Bとの権力関係としてではなく、市民の政治的存在様式とみる。

市民が、観念のうちで自分自身を自由な存在として認識するときの自己Aは、経済的に服従あるいは物象的に依存している自己Bとの同等性を、Bを政治的自由の化身とすることで、そうするのである。

＊　基本的人権とは何か

だから、基本的人権は、人に生まれながらの権利や、闘いとった権利というよりはむしろこの市民社会における市民の二重性によって、絶えず生み出されている。

＊　民主主義とは何か

意志決定のシステムとしての民主主義が決定しうる事柄が、政治的な事柄に限られるのも、民主主義とは二重性をもつ市民の政治的自由という領域のみで成立しているからである。

＊　アソシアシオンと協同

資本家的生産様式が支配的な社会にアソシアシオンが形成されたとき、アソシアシオンは市場での競争にさらされる。しかしながら、今日では、資本家的生産がピークを過ぎ、世界を、全体として資本家的生産様式の支配の下に置くことを困難にしている。このことは、種々のアソシアシオンの誕生をもたらしている。

アソシアシオンは、物象的依存関係にもとづく人格的独立として特徴づけられる市民社会の市民を、協同した諸個人に置きかえる。ここでは、個人が、市民のように自己を分裂させ、自己の内に権力関係を現象させることはない。ここに、協同が政治と民主主義を止揚しうる根拠がある。

第２部　シンポジウムでの問題提起

アソシエ21とは何か

1)　11月7日アソシエ21関西講演集会

＊　230余名の参加、若者が半数を超える。

＊　内容は面白かった。楽しめる企画でないと意味はない。

＊　杉村昌昭さんのコメント … これからどうするか、方向性が出ていないのではないか。
　　主催者の一人であった私としては、あらかじめ方向性を出すことは避けたかった。

2)　アソシエ21のイメージ

＊　フランスでは、アソシアシオンと言えば、政治結社から、地域のスポーツクラブまで入っている。

＊　単一の組織ではなく、連合体と考えたい。アソシエ21に入って何か義務を果たすのではなく、それぞれの運動や組織に所属し活動している人達が、連合できる場をめざしたい。また、活動に出会えなかった人達が、活動と出会えるようになる場、でもありたい。

＊　連合ということのイメージは、意志の統一ではない。政治結社にあっては政治的意志の統一が全てである。この作法を連合のなかに持ち込んで欲しくない。一つのことについて見解を異にする人達が、お互いに排除し合わずに連合するためには、意志の統一以外の要素で結びつくことが必要。

＊　連合の疎外要因となるのは、新・旧左翼の政治的意志統一を大前提に置く発想である。この発想はそれぞれが自己批判的に克服すべき。資本と国家に対抗する運動をどう捉えるか、というテーマで、それぞれの政治的精神を点検することが問われている。

＊　連合が持つ力はベクトルの合力ではなく重力のようなものである。個々人が描いている運動や活動の方向性とは別の力がおのずから連合の力を増大させる。

＊　連合に指導は必要ない。媒介が必要。媒介にもとづく主体間の共鳴が力の実体である。

＊　論争は必要だが、論争それ自体は何も生まない。昔、「論争よ起これ」というテーマで刊行された『窓』という雑誌が廃刊になったが、従来の論争は政治的意思統一のための手段であり、政治的意志統一の意義が相対的に低下している 今日の運動のなかで、論争の意義も低落していったのだ。連合での議論は、＜違いの尊重＞へと向わねばならず、これは論争ではなくて対話である。＜違いの尊重＞が共鳴への第一歩である。

3)　皆んなが媒介者になろう。

＊　アソシエ21には、指導者がたくさん参加している。このたくさんの指導者たちが、自分たちの運動と組織の中で媒介者になれたときにしか、アソシエ21の未来はない。

＊　故 武田桂二郎 グリーンコープ会長の媒介論を紹介する。「人は指導しようとして

指導しきれるものではない。状況との対決を常に念頭に置いて、資質と資質、思想と思想との聡明な出会いを媒介すること、その際、状況、資質、思想について、それぞれ明示する必要があれば、その明示がやや指導に近い。媒介の方が、指導より 観念が大きい。」

　柄谷行人さんは、11月7日の集会で、自身の役割について「触媒である」と語った。誰でも媒介者になれる。アソシエ21の会員が多数の非会員とのあいだで媒介者となれなければ、アソシエ21の未来はない。

4)　私が媒介するテーマ「 50過ぎからの社会運動 」

＊　大企業のリストラで、世代間戦争が始まっている。周辺事態法や日の丸、君が代の強制に見られるこの間の自民党政権の反動化は、この世代間戦争へのそなえという要素が大きい。

＊　世代間戦争の激化か、そのアソシエ的解決か、資本と国家への対抗運動の、一つの軸は、ここにある。

＊　生活クラブ生協創始者、岩根邦雄さんの問題提起。ドイツで、NPOや協同組合の組織やリサイクルなどの社会的活動が成長しているのは、失業率が10%を超えているから。

＊　失業者が資本の下への再雇用を求めるしかない日本の現実を変えること。失業者どうしがそれぞれ仕事をつくり出せるようにすること。この出会いを媒介すること。大企業から追われた失業者たちが、社会的に意義のある仕事を発見、創造して、働き続けられること。これこそ日本のアソシエーションの未来像の一方の柱である。

5)　私の状況論「 対話を求めて 」

＊　80年代後半、マルクスの価値形態論の読み直しにより、商品からの貨幣の生成は、商品所有者達の無意識のうちでの本能的共同行為（この共同行為は価格づけの裏面にある。）によることを知る。

＊　これは、物象（商品）による人格の意志支配であり、この事態を物神性とは別の範疇としての物象化と捉えた。廣松渉をはじめとする種々の物象化論とのちがいは、物象化を物象による人格の意志支配の様式とみる点。

＊　この新たな物象化論から ベルリンの壁が打破られる前の時点で、ソ連社会主義の敗北の根本要因を明らかにし得た。無意識の内での本能的共同行為は、プロレタリアート独裁の国家といえども、政治や法律や権力行使といった意志行為ではなくせない。商品（市場）が実現している今日の人間の社会性よりも、より社会的な関係を形成しなければ、商品・貨幣はなくせない。ここから、新しい社会運動の目標を、脱物象化におき、まず政治権力を奪取し、しかる後に社会革命をという従来の革命の戦略に変わる、もう一つの社会変革論の模索に入る。

＊　生活クラブ生協のワーカーズ・コレクティブが主張していた「もう一つの働き方」やモンドラゴン生産協同組合群の理論と経験に学ぶうち、資本家の下に働きに行かなくても生活できるような、働く場づくりが、資本主義を廃絶する運動としての意義をもっているこ

とが判明。労働者生産協同組合で、資本家に負けないだけの投資を行うことを闘争として提起したモンドラゴンの媒介者、アリスメンディアリエタの戦術の普遍性。

宇野弘蔵の労働力商品化の廃絶論と似ているが、宇野説からは 実践的方策が導けなかった。ほとんど賃労働の廃止を言い換えただけ。これに対して、アリスメンディアリエタの提起は脱物象化の運動論たり得た。

＊　価値形態の解明でマルクスが用いた方法を抽出し、それを用いて、科学では解明できなかった人間の社会関係（商品・貨幣・資本・言語・国家・社会性など）を解明していく文化知の方法の提起。これは実は、この間浮上してきた環境問題に対する環境倫理での対応という、多数説への異議申立でもあった。

＊　アソシエ21関西の活動を開始し、柄谷行人さんの消費協同組合論を知る。 資本の剰余価値が流通過程でしか実現されない以上、 資本の循環のなかで消費者として現れる労働者は、そこでは剰余価値を無化する主体となり得る、ということがその核心だった。 流通過程での脱物象化の方向性が示された。

＊　同じく、柄谷さんに『批評空間』22号の LETS（地域通貨）についての西部忠さんの論文をすすめられ研究したところ、これは、無意識のうちでの本能的共同行為による貨幣の創造ではなく、 支払決済システムの共同化による、労働交換システムであることを知る。 資本主義の信用制度と信用創造は、銀行に企業や国や家計の支払決済の口座が集中され、私的に所有されていることを土台としている。この支払決済システムの存在が、債権・債務関係の上にたつ信用の関係を発達させた。そして、今日支払手段としての貨幣は、支払決済システムを土台にした、預金通貨をはじめとする 種々の信用貨幣で行われ、預金証としての性格をもつ銀行券が、金貨に代わり、流通手段として機能している。 コンピューターの発達により、この支払決済システムは、オンラインで結ばれて、世界単一の金融市場となり、世界単一の資本市場を成立させた。ところが、本来社会の資源配分を行なう役割をもつ金融市場が、いまや経済成長という尺度からみても、国民経済にとっての大きな撹乱要因となってきている。

信用制度にオルタナティブはないか？ ひっそりと LETS が登場した。これは、既成の信用制度では私有されている、支払決済システムの共同化であった。利子をなくしたことで、資本の商品化の道もふさがれている。

飯尾要さんが提起した技術の転成法則が、今私たちの目前で働いている。 コンピューターは資本家的大企業によって、価値増殖を目標に発達、普及化されてきたが、今や、この技術が、地球上の多くの人々の口座を共同化するテコとされはじめたのである。ついに、信用制度における脱物象化の方向性が明らかとなった。

＊　資本の運動は、『資本論』で分析されているように　①　資本の直接的生産過程　②　資本の流通過程　③　資本家的生産の総過程、とからなる。それぞれの分野での脱物象化の運動論が、信用制度における脱物象化の方向性が提示された時点で完結した。

アソシエ21は、このような状況のうちにある。

紹介

榎原　均　著『価値形態・物象化・物神性』

本書の特色は、商品、貨幣、資本における物象化を、物象による人格の意志支配の様式と捉え、その根拠として、商品が人が自分の意志を宿しうる概念的存在であることに求めた点にある。

この点がマルクスの価値形態論の解説から導き出されたのであるが、この内容を簡単にまとめてみよう。商品の価値形態は、諸使用価値をつくる具体的労働を、同等な人間労働に還元する、という抽象を行い、かつ、その同等な人間労働の分量を等価商品の現物形態で表して、量的判断を明示している。

人間の頭脳は、対象を分析して、抽象し、これを総合して判断するという思考の機能をもつが、商品の価値形態も、思考に特有な抽象及び判断と同種の機能をもった概念的存在なのである。それゆえ、人は自分の意志を商品に宿すことができ、商品という物象による人格の意志支配が成立し、物象化が起こることになる。

この解釈は、コロンブスの卵のようなもので、一たん明示されれば難なく了解されるであろう。では、これまでの価値形態論研究においては、何故この解釈が成立してこなかったのだろうか。それは価値形態の場合の抽象化が、思考の場合の分析的抽象ではなくて、綜合による抽象化であり、反照の弁証法（これもいーゲル研究者の誰もが理解しえてはいない）であるから、その種の抽象の様式の存在に気付くことのなかった従来の研究者たちにあっては、価値形態の概念的存在自体が謎とならざるを得なかったのである。

物象化について論じる際に、価値形態についてのこの把握がどのように決定的か、ということは、貨幣の生成について考えてみると明確になる。商品の価値形態が概念的存在であることが判明すると、諸商品は共同して単一の商品で価値を表現する場合にのみ、互いに商品として関連しあえる、という商品の本性に支配された商品所有者たちが、交換過程に直面して本能的な共同行為を行うことによって貨幣が生成されることがわかる。

だから物象化とは物象に意志を支配された人格が、本能的に物象の本性に従った行動をとるところに成立するのである。このように物象化を意志支配の様式と捉え、物象に概念的存在を見いだすと、物象化論の新しい地平が見えてくる。自分に文学の才能があればマンガのシナリオにしてみたいほどの面白い世界がそこに開けている。

いーゲルはカントの物自体についての説をくつがえし、物の内面が意識の運動としてあることを看破した。だからいーゲルにあっては、世界が概念であった。しかしいーゲルは意識の内面については反省しなかった。マルクスの物象化論は意識の内面が、物象相互の社会関係とその運動にあることを示したのである。そうすると、いーゲルが世界に概念を見たのは、意識の内面についての直感（神の存在）に支えられていたことになる。マルクスは物象の概念的存在を解明することによって、同時に神の構造を解明したといえるのである。そして、ここに物象化と物神性との位相のちがいも表現されている。

『価値形態・物象化・物神性』
榎原　均　著　　定価２５００円　　発行者　資本論研究会

目次
第一部　価値形態と物神性
第一章　マルクスの物神性批判論
第二章　マルクスの価値形態論
第三章　価値形態論の課題
第二部　マルクスの物象化論
第四章　マルクスの物象化論の形成過程
第五章　物象化についての諸説
第六章　価値形態と物象化
第七章　資本と物象化
第三部　物象化・物神性と階級闘争
第八章　資本物神と資本主義の危機
第九章　国際主義の復興
第十章　革命主体の形成

注文は送料３８０円を加えて、郵便振替で送金されたし。
郵便振替　口座名　資本論研究会
口座番号　０１０９０－５－６７２８３

カセットテープ
榎原　均　『資本論』講義
『価値形態・物象化・物神性』の内容を『資本論』に則して講義。
カセットテープ１８巻（２巻９０分残り６０分）　テキスト３冊付き
定価　４５０００円（送料込）

内容　第１講～第１５講　商品と貨幣
第１６講～第１７講　貨幣の資本への転化
第１８講～第３６講　資本の生産過程
商品論にはとくにこだわり、物象化論、ベルンシュタイン論争でしめくくっている。

注文先　郵便振替　口座名　資本論研究会　口座番号　０１０９０－５－６７２８３

あとがき

ドキュメントは、読みにくいものです。それで、文献解題とは別の角度からインフォメーションを試みてみます。まず、新・旧左翼の方で、まだ私の文献に接していない方々は、9)と8)から入って下さい。次に、価値形態論についてきちんと研究しようと思われる方は、6)、7)、11)、13)を経由して、最終的には、『価値形態論・物象化・物神性』にまで進んで下さい。また、アソシエ21関西のイメージを捉えたい、というのなら、1)、2)、3)、4)、12)、13)、あたりに目を通して下さい。

そして、最後に、この間アソシエ21関西にかかわった方々のアソシエーション論についての文献を紹介しておきます。

柄谷行人	『可能なるコミュニズム』	太田出版
	『批評空間』24号	太田出版
	『情況』1999年7月号	情況出版
田畑　稔	『マルクスとアソシエーション』	新泉社
	『アソシエ21ニューズレター』6号	
表　三郎	『アソシエ21ニューズレター』6号	